引田高堰遺跡

送電線新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

群馬県勢多郡富士見村遺跡調査会

序

富士見村では、これまでは主に県営ほ場整備事業に伴って南西部に位置する横室地区、米野地区、原之郷地区、あるいは南東部に位置する小暮地区、時沢地区などで発掘調査を行ってきました。しかし、近年では民間開発が活発化し、これに伴った発掘調査が増えております。今回の引田高堰遺跡の調査も送電線の建替に伴って行われたものです。

遺跡の所在する漆窪地区には数多くの遺跡がありますが、これまでは北側の地域で調査が行われただけで、南側に位置する引田高堰遺跡周辺の状況はあまり分かっていません。

発掘調査では縄文時代と平安時代の住居跡が確認され、この地域が古代より人々の生活の場であることが分かりました。調査範囲が狭く遺跡の全体像は不明ですが、こういった小さな調査を積み重ねていくことにより、地域の歴史が徐々に解明されていくものと思われます。

この遺跡の調査成果が多くの人々に活用され、学術研究の一助となり、埋蔵文化財に対する理解を深める役を担えることを願います。

最後になりましたが、調査の主旨をご理解いただき、ご協力いただきました東京電力株式会社ならびに関係者各位、さらに、寒風が吹き荒ぶなか調査に従事していただいた皆様に心より謝意を表し、序といたします。

富士見村遺跡調査会

会長　浅　井　多津男

例　　言

1．本書は送電線建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本遺跡は群馬県勢多郡富士見村大字漆窪字東宿原253-2外に所在する。

3．調査期間は平成12年11月24日から平成12年11月30日、平成12年12月15日から平成12年12月25日までである。

4．発掘調査及び報告書刊行にかかる経費は、事業者である東京電力株式会社が負担した。

5．発掘調査は富士見村遺跡調査会会長　浅井多津男が東京電力株式会社群馬支店長　大内荘久と委託契約を締結して実施した。富士見村遺跡調査会の組織は以下のとおりである。

会長　浅井多津男、副会長　木暮英夫、理事　羽鳥忠男、狩野　勲、監事　柳井久雄、事務局員　齋藤秀男、福田貫之

6．本書の編集・執筆は福田が担当した。また、石器の実測・分析は角田真也氏（高崎市教育委員会）の手を煩わせた。

7．出土遺物及び図面等は富士見村教育委員会で保管している。

8．発掘調査及び本書作成にあたり以下の諸機関並びに諸氏にご教示、ご協力を賜った。記して感謝したい。

群馬県教育委員会文化財保護課　(財)群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団　勢多郡町村教委事務研究会社会教育部会文化財分会の諸氏　尾瀬林業株式会社　井上慎也　大塚昌彦　加藤　竜　小林　修　齋藤幸男　大工原豊　津金澤吉茂　成田健太郎　長谷川福次　右島和夫　山口逸弘

9．発掘調査・整理作業は福田の他、小見明美　関口照子　奈良美江　本望充子が行った。

凡　　例

1．本書で使用した地図は国土地理院発行１：25000地形図「渋川」、富士見村役場発行１：2500原形図を用いている。

2．遺構図中の断面基準線高は標高を表し、遺構図中の方位は座標北を示している。

3．挿図縮尺は以下のとおりである。

全体図　1/100　　住居跡　1/60　　土坑　1/60　　遺物実測図　1/2、1/3、1/4

4．遺構及び遺物図版中のスクリーントーン、マークは下記のことを示す。

地山　　繊維土器　　内・外面赤彩範囲土器

外面赤彩痕土器（範囲不明）　●　　釉薬範囲　　使用痕範囲

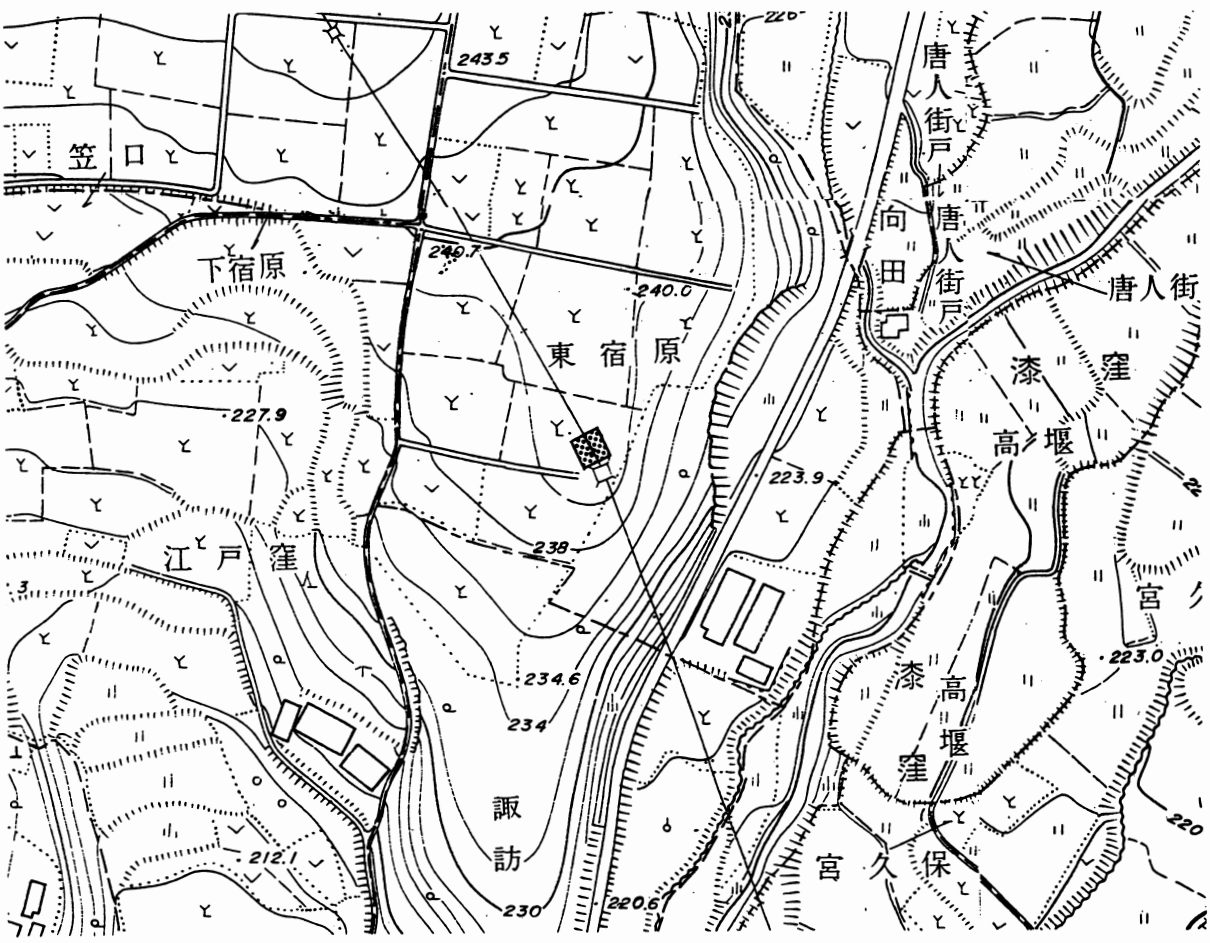
目　　次

序　文
例　言
凡　例
Ⅰ．調査に至る経緯と調査の経過……1
Ⅱ．遺跡の位置と周辺の遺跡……2
Ⅲ．土層堆積……5
Ⅳ．検出された遺構と遺物……6
Ⅴ．ま と め……23
写真図版
抄　録

Ⅰ．調査に至る経緯と調査の経過

平成12年10月、尾瀬林業株式会社（東京電力グループ）から群馬県勢多郡富士見村大字漆窪内における鉄塔新設に関わる開発計画が富士見村教育委員会に掲示され、埋蔵文化財の包蔵地の有無の照会があった。開発予定地は周知の遺跡である「引田高堰遺跡」内であり、また遺物散布調査の結果土器片が確認されたことから、工事着工前に試掘調査を実施し、包蔵状況に応じた工事計画ならびに保存計画を立てる必要があるとの回答をした。度重なる協議の結果、試掘調査を実施し、遺構が確認された際には富士見村教育委員会が組織する富士見村遺跡調査会が発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることで合意に至った。同年11月10日に試掘調査依頼書が提出され、これを受けて同年11月17日に試掘調査を行った。試掘調査の結果、遺構が確認されたため事業者に連絡し、同年11月22日に東京電力株式会社群馬支店長　大内荘久と富士見村遺跡調査会会長　浅井多津男との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書が締結された。

発掘調査は同年11月24日から開始し、まずバックフォーにより関東ローム層を遺構検出面とし表土剝ぎを行い、同時に人力により遺構確認も行った。座標杭は国家座標第Ⅳ系に準拠した４×４ｍの基準杭を設定し平面測量の基準とした。発掘調査開始後、しばらくして既設の鉄塔解体に伴い調査は一時休止したが同年12月25日に現地での調査を終了した。



第１図　引田高堰遺跡周辺の地形

II．遺跡の位置と周辺の遺跡

1．遺跡の位置

引田高堰遺跡が所在する富士見村は、群馬県の県庁所在地である前橋市の北側に接し、上毛三山の一峰である赤城山の南西麓から山頂までを村域とする狭長な村であり、東は大胡町・宮城村、西は北橘村・赤城村、南は前橋市、北は粕川村・新里村・黒保根村・利根村と接している。地形的には標高約450mを境として北の山岳地、南の緩傾斜の裾野部に分かれる。さらに、裾野部は東方の扇状地形（白川扇状地）と西方の比較的開析谷の発達した丘陵状地形とに区分できる。引田高堰遺跡は細ケ沢川により形成された標高約240m付近の丘陵状地形の南端に位置している。

2．周辺の遺跡

富士見村は、富士見村誌編纂に伴う尾崎喜左雄博士（群大史学研究室）による遺物散布調査や古墳調査が、群馬県遺跡台帳作成の際による遺物散布調査がそれぞれ行われ、また、昭和58年以降の発掘調査により数多くの遺跡が確認されている。ここでは、これらの資料とこれまでの発掘調査をふまえ、引田高堰遺跡（1）周辺地域の歴史的環境を概観してみたい。

【旧石器時代】

標高約300m前後に位置する小原目遺跡（2）からは剝片が、標高約350m前後の小暮東新山遺跡（3）からは槍先形尖頭器の製作工程で出ると考えられる剝片が確認されている。また、小暮東新山遺跡からは全国的に類の少ない住居状遺構が検出されている。

【縄文時代】

標高約450m付近の傾斜変換点を境とする裾野部の台地上を中心に分布し、数多くの遺跡が存在する。上百駄山遺跡（4）、田中遺跡（5）、久保田遺跡（6）、田中田遺跡（7）、由森遺跡（8）、愛宕山遺跡（9）、広面遺跡(10)、向吹張遺跡(11)、見眼遺跡(12)、旭久保C遺跡(13)、陣場・庄司原遺跡群(14)などを代表に裾野部の台地上や丘陵上で確認されている。時期的には前期と中期に遺跡数は多いが、草創期から早期、後期から晩期にかけての遺跡数は少ない傾向にある。上百駄山遺跡からは草創期から早期にかけての土器片が確認されている。前期は数多くの遺跡が発見されており、田中遺跡・久保田遺跡では二ツ木式が、田中田遺跡では関山式が、由森遺跡では黒浜式がそれぞれ確認されている。また、愛宕山遺跡・広面遺跡からは諸磯b式、c式が多量に確認され、当該期の貴重な資料を提供している。向吹張遺跡・見眼遺跡・旭久保C遺跡からは中期の資料が確認されている。特に旭久保C遺跡は出土遺物が多量で、在地外の土器も確認されており交流文化圏の広さが特筆される。陣場遺跡は中期が主体の集落であるが後期の敷石住居も確認されている。しかし、村内において後期から晩期の遺跡は前期から中期に比して少ない。

集落以外にも標高330m前後から500m前後を境に、坂上遺跡(15)・石井柴山遺跡(16)をはじめ多数の陥し穴が検出されている。

第２図　引田高堰遺跡と周辺の遺跡

【弥生時代】

富士見村村誌には3カ所が報告されているのみである。田中田遺跡(7)から遺構は確認されていないが中期前半、後期後半の土器片が出土しているため、付近には遺構の存在が予想される。

【古墳時代】

村誌では約90基の古墳の存在が報告されているが、現在では耕作に伴い削平されたものが多い。古墳は白川沿いの時沢・小沢、前橋に接する原之郷・横室、北橘村に接する米野、山口に比較的多く分布している。確認された古墳のうち、陣場・庄司原遺跡群(14)からは古墳時代前期の方形周溝墓を5基調査している。また、九十九山古墳(17)は自然石乱石積の袖無型横穴式石室で全長約60mを測る勢多郡内で最大の前方後円墳である。周辺地域を統括した盟主的な首長層の存在を推測させる。

集落としては、田中田遺跡(7)からS字甕を伴う住居が、白川遺跡(18)からは古墳時代中期の住居がそれぞれ確認されている。古墳時代後期になると旭久保遺跡(19)を代表に遺跡数はやや増加する傾向にある。

【奈良・平安時代】

古墳時代後期からの遺跡数増大が、この時代になるとさらに加速し遺跡は飛躍的に増大する。占地もほぼ縄文時代と同じであり、縄文時代と同様に数多くの遺跡が確認されている。その中でも東紺屋谷戸遺跡(20)、組之木原遺跡(21)を代表とする時沢は『和妙類聚抄』にみられる時沢郷の名残である可能性があり、周辺には濃密に遺物が散布している。なお、陣場・庄司原遺跡群(14)からは約150軒の住居跡が確認され、豊富な鉄製品や土錘が出土している。また、小原目遺跡(2)からは小鍛治遺構が確認されており、周辺地域に鉄製品を供給する集落としての位置づけが想定される。

【中・近世】

既調査の館跡と思われる遺跡は約10遺跡を数えるがそのほとんどが県営ほ場整備事業に伴うものであり、道路予定地などのごく狭い範囲で確認される溝等である。このような状況の中で上百駄山遺跡(4)は面的に調査でき、ある程度の館内の構造が判明している。また、城跡には漆窪城跡(22)、田島城跡(23)、岡城跡(24)、皆沢城跡(25)、丸山城跡(26)、森山城跡(27)、金山城跡(28)が知られている。

Ⅲ　土層堆積

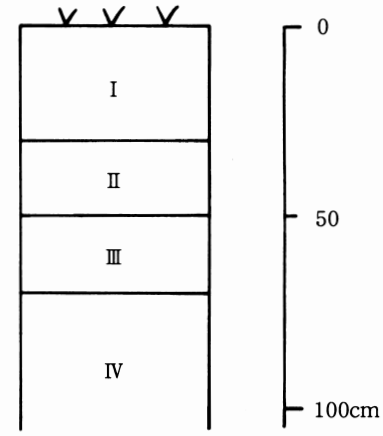
本遺跡の土層堆積は、同一丘陵上の他遺跡と同様である。

Ⅰ層　　表土　耕作土

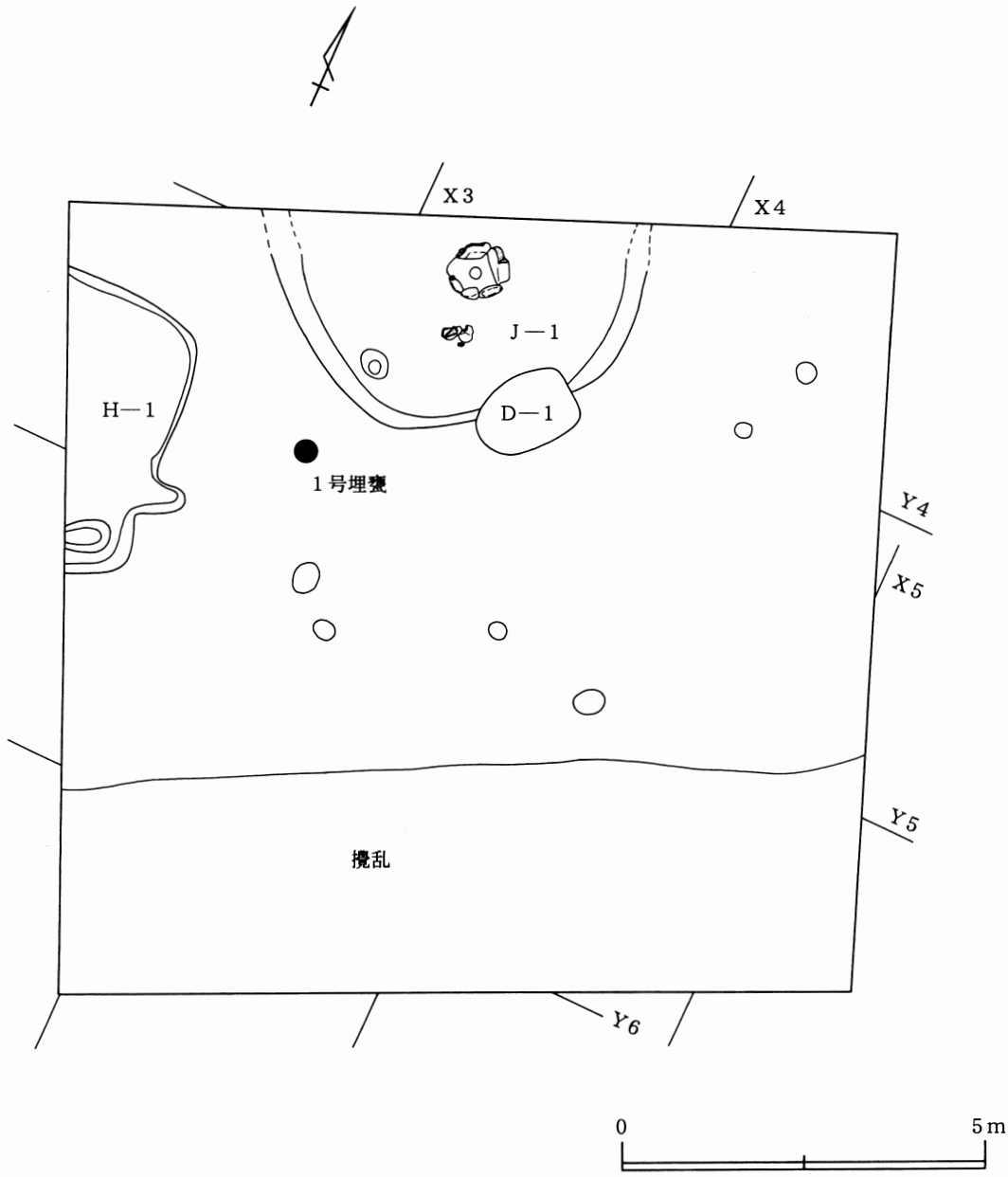
Ⅱ層　　黒褐色土層　淡色黒ボク土と黒ボク土が混在し、
As-C、Hr-Fp を含む。

Ⅲ層　　にぶい褐色土層　遺構確認層

Ⅳ層　　黄褐色土層



第３図　基本土層図



第４図　調査区全体図

IV　検出された遺構と遺物

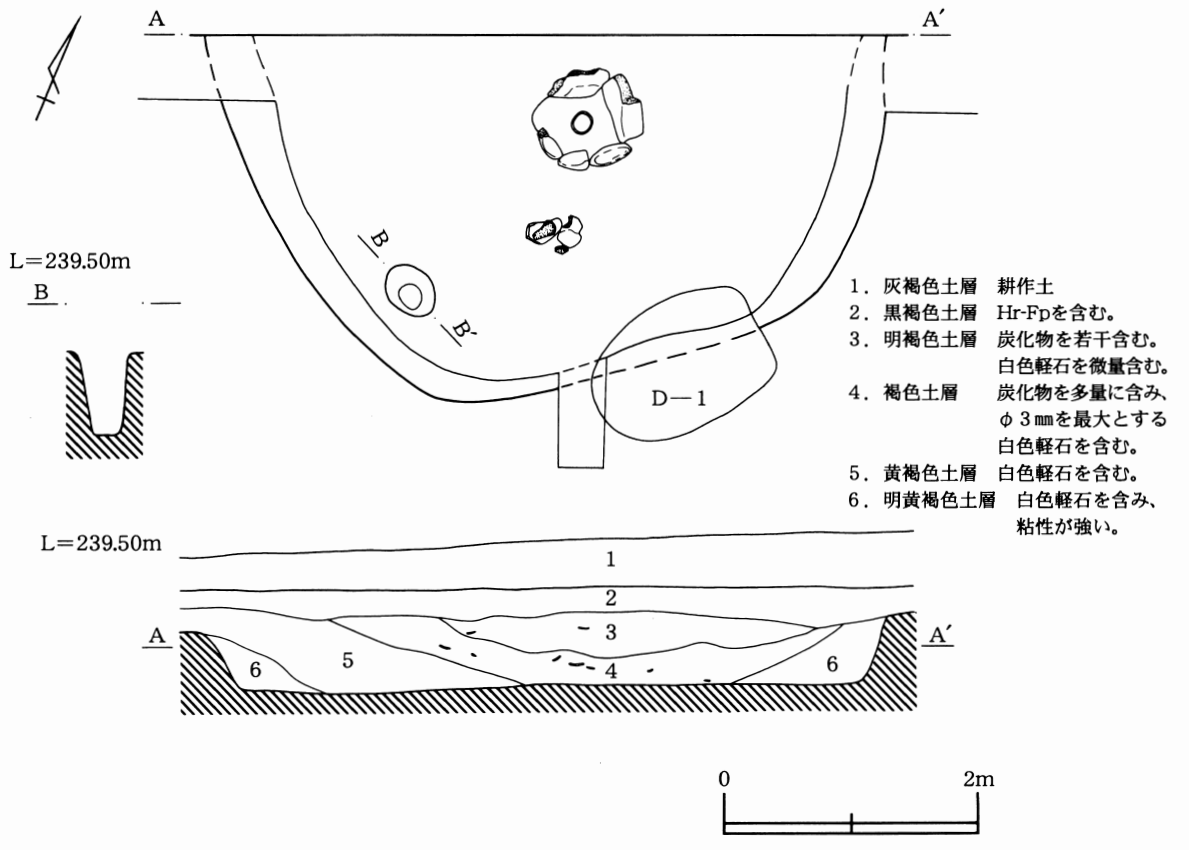
1．竪穴住居跡

J－1号竪穴住居跡

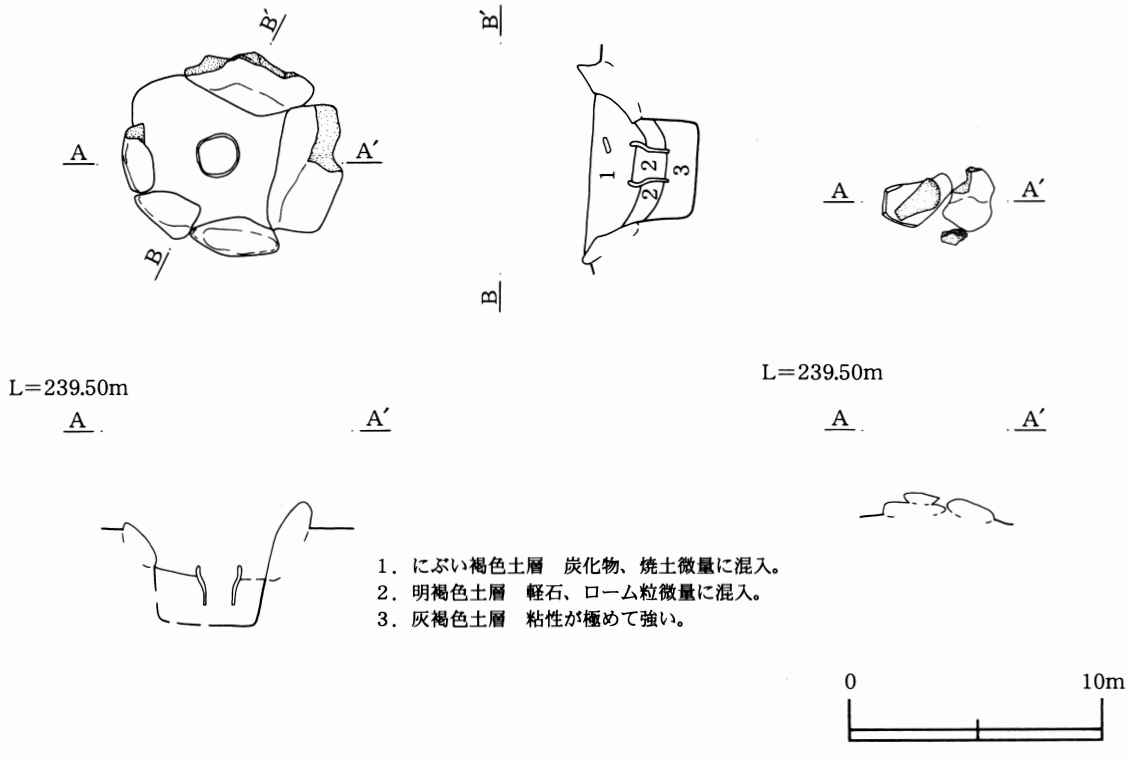
本住居跡は調査区の北端に位置する。住居跡の半分は北側の調査区域外に伸びるため全容は不明であるが、平面形は円形を呈するものとみられる。東西4.9m、南北は2.6mを調査した。床面積は調査範囲で9.8㎡である。壁高は東壁で約0.6m、西壁で約0.7m、南壁で約0.6mをそれぞれ測る。柱穴は長径約0.5m、短径約0.4m、深さ約0.7mを測る1本が検出された。壁溝は確認されなかった。床面は平坦であり、やや軟質の傾向を有する。炉址は平面形が正方形を呈する石囲埋甕炉である。北側と東側に長径約50cmの礫1個を、南側は長径約20cmと長径約30cmの礫2個を据えて構築している。西側は長径約25cmの礫1個が確認されているが、掘り方から本来は南側と同様に礫2個であった可能性がある。外径で85cm×75cm、内径で45cm×40cmを測り、床面からの掘り込みの深さは約40cmを測る。土器は胴下半を打ち欠いた深鉢が正位置で粘質土の上に埋設されていた。礫の上部は床面から約10cmほど高くなっており、土器口縁は礫の上部から約30cmほど低くなっている。また、炉址の南側約50cm付近に床面に密着した状態で集結した礫が検出された。

遺物は石囲炉の炉体土器のほか覆土上層、下層より土器と石器、黒曜石のチップ、極小の炭化物・焼土が出土した。また、焼成を受けた小礫が確認された。

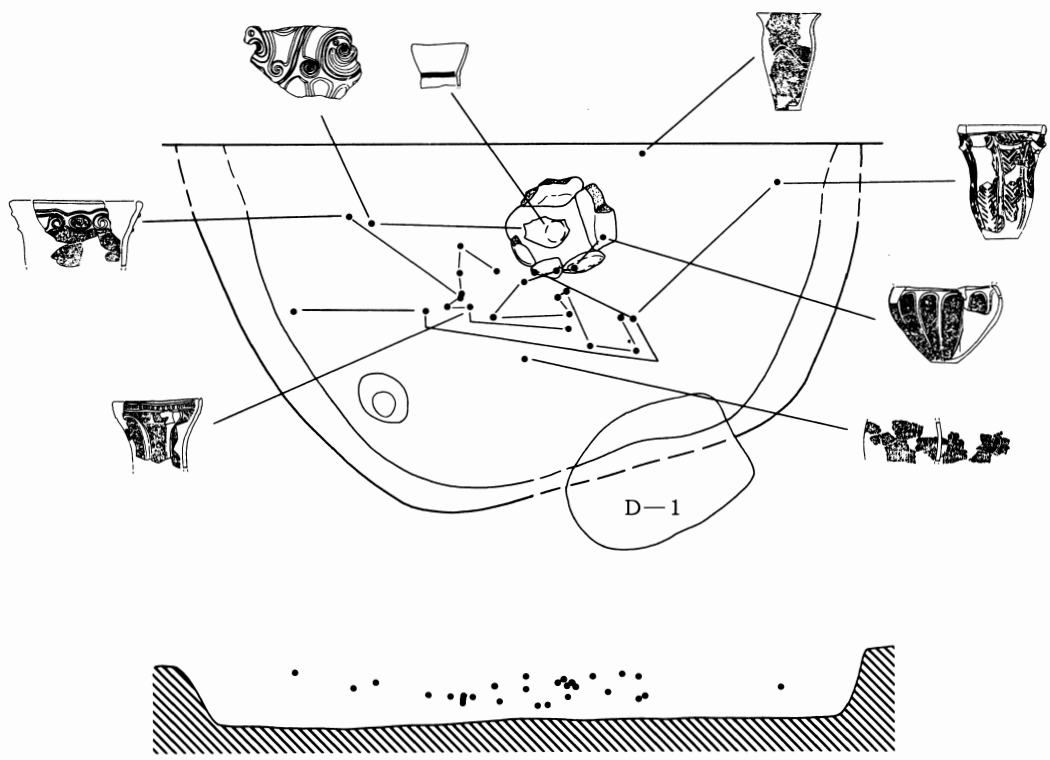
出土した遺物等から本住居跡は縄文時代中期後葉に帰属するものとみられる。



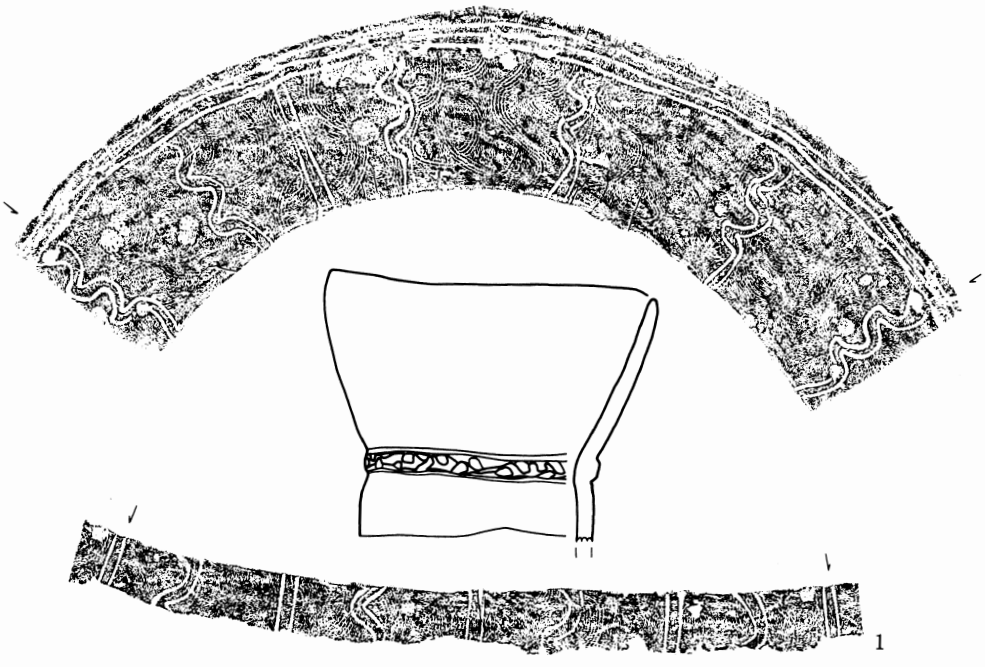
第5図　J－1号竪穴住居跡

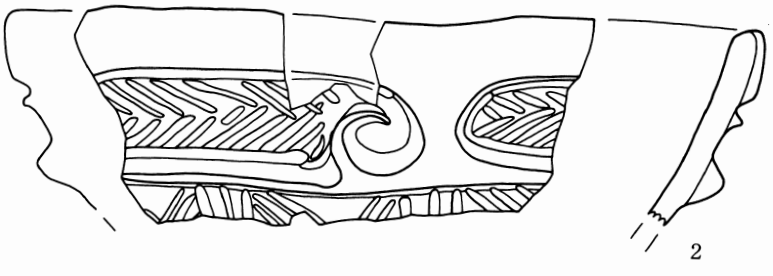


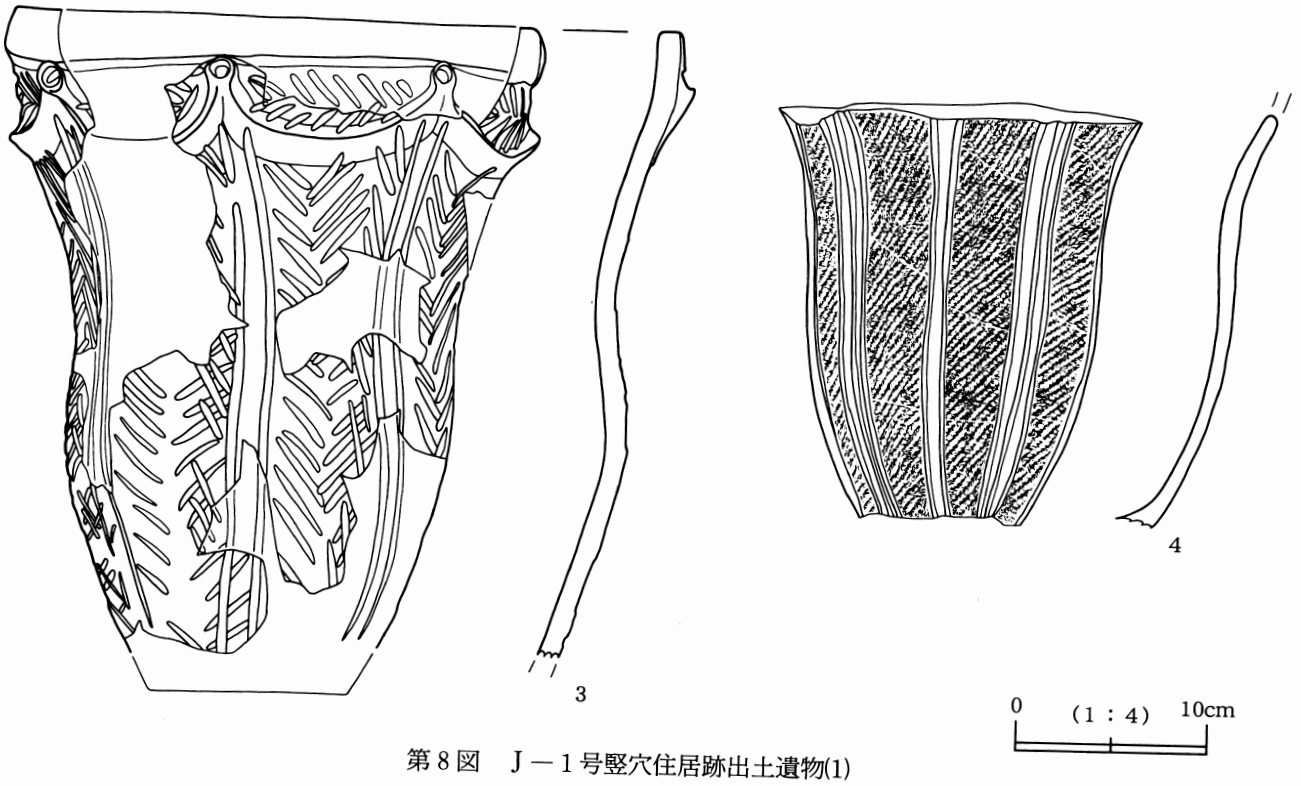
第6図　J－1号竪穴住居跡石囲炉及び集石



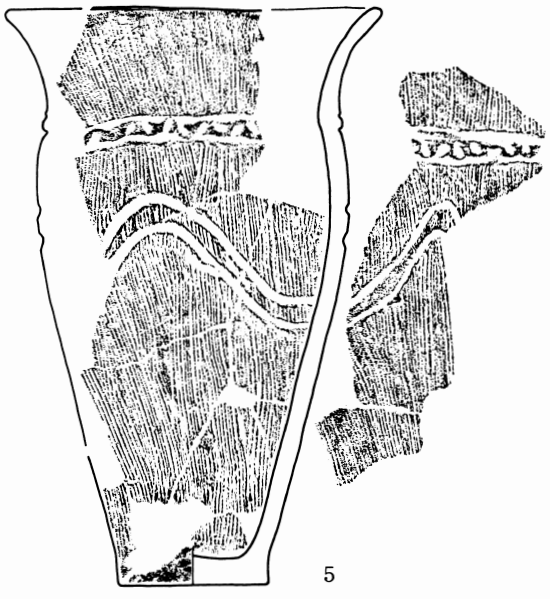
第7図　J－1号竪穴住居跡出土遺物分布図



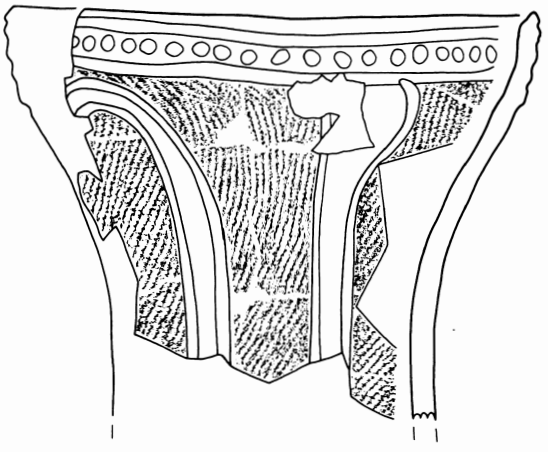




第8図　J－1号竪穴住居跡出土遺物(1)

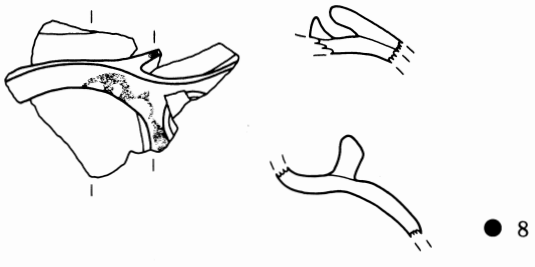


5

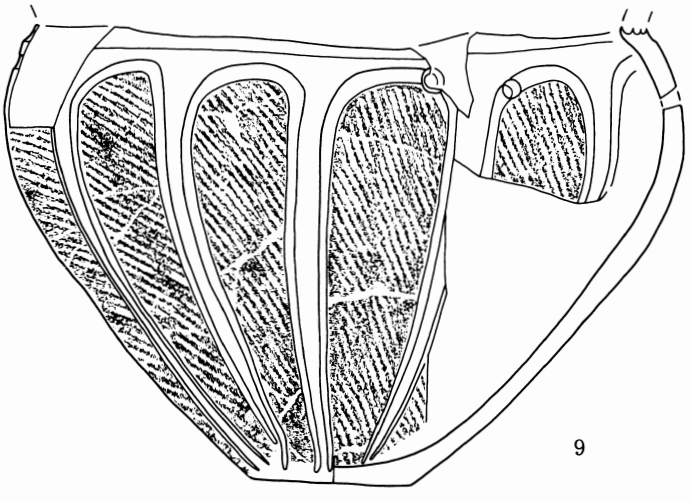


6

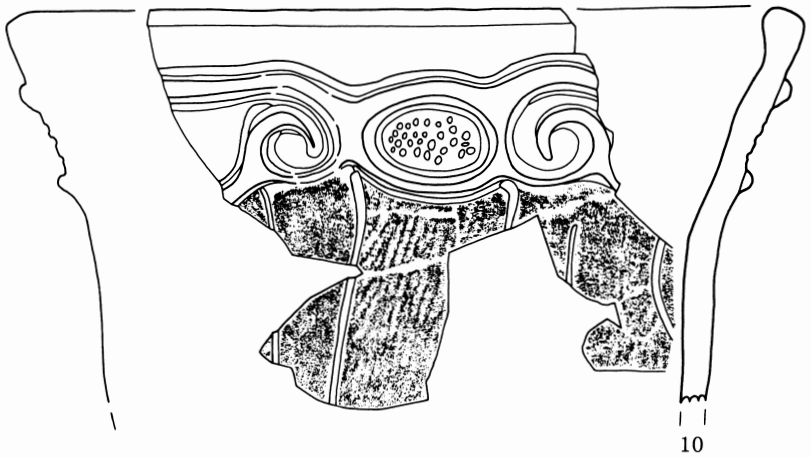
7



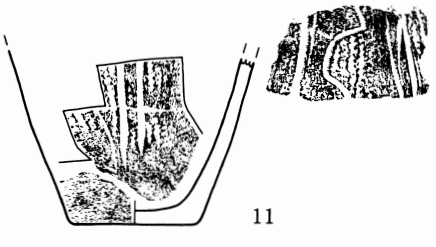
8



9



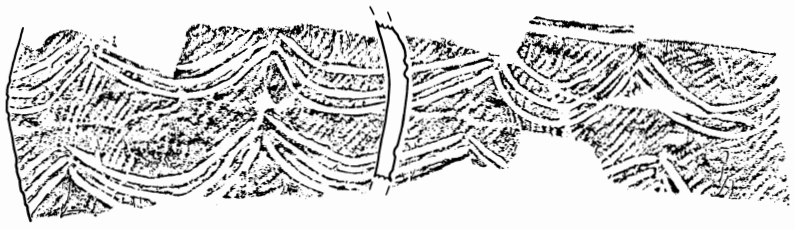
10



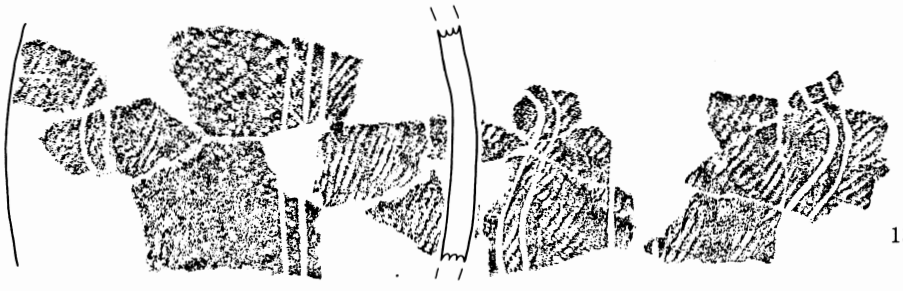
11

0 (1：4) 10cm

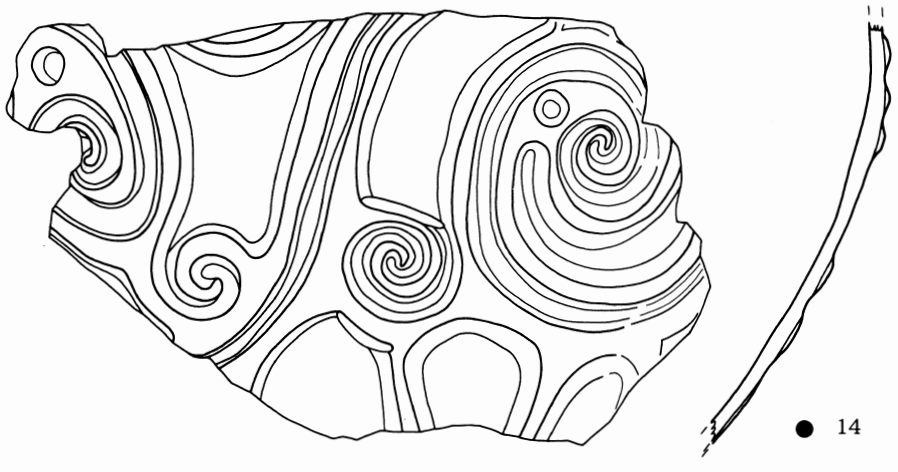
第9図　J－1号竪穴住居跡出土遺物(2)



12

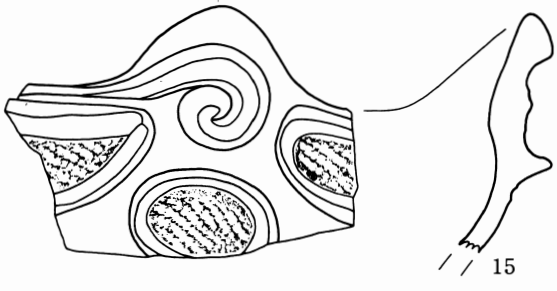


13

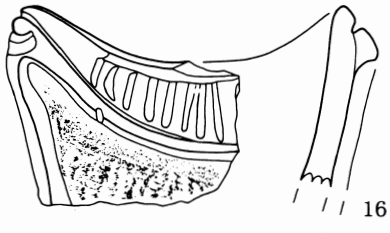


14

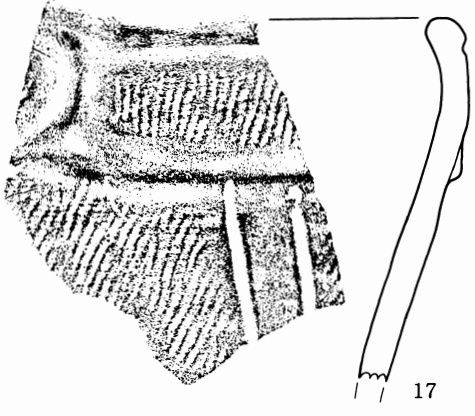
0 (1：4) 10cm



15



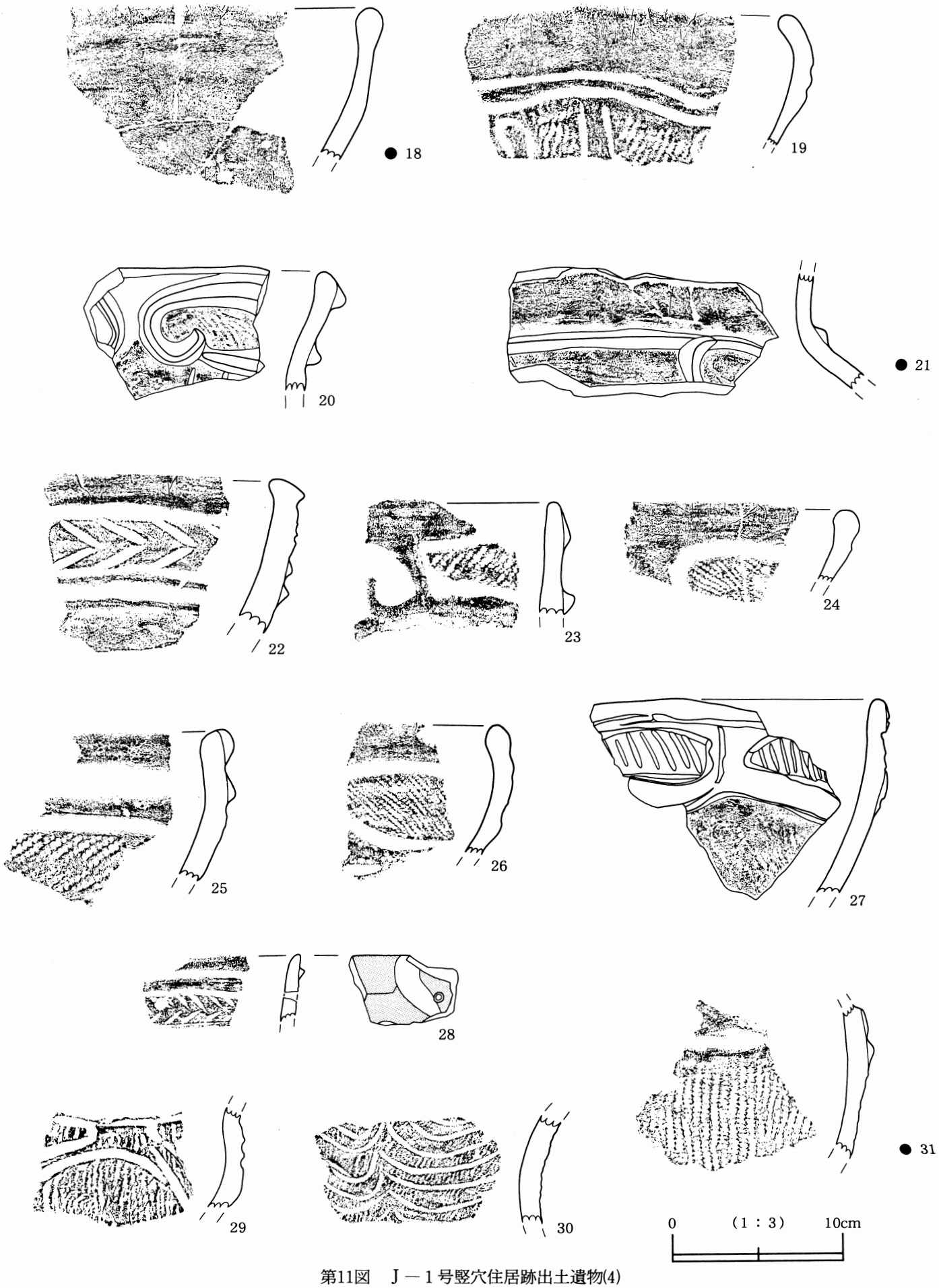
16



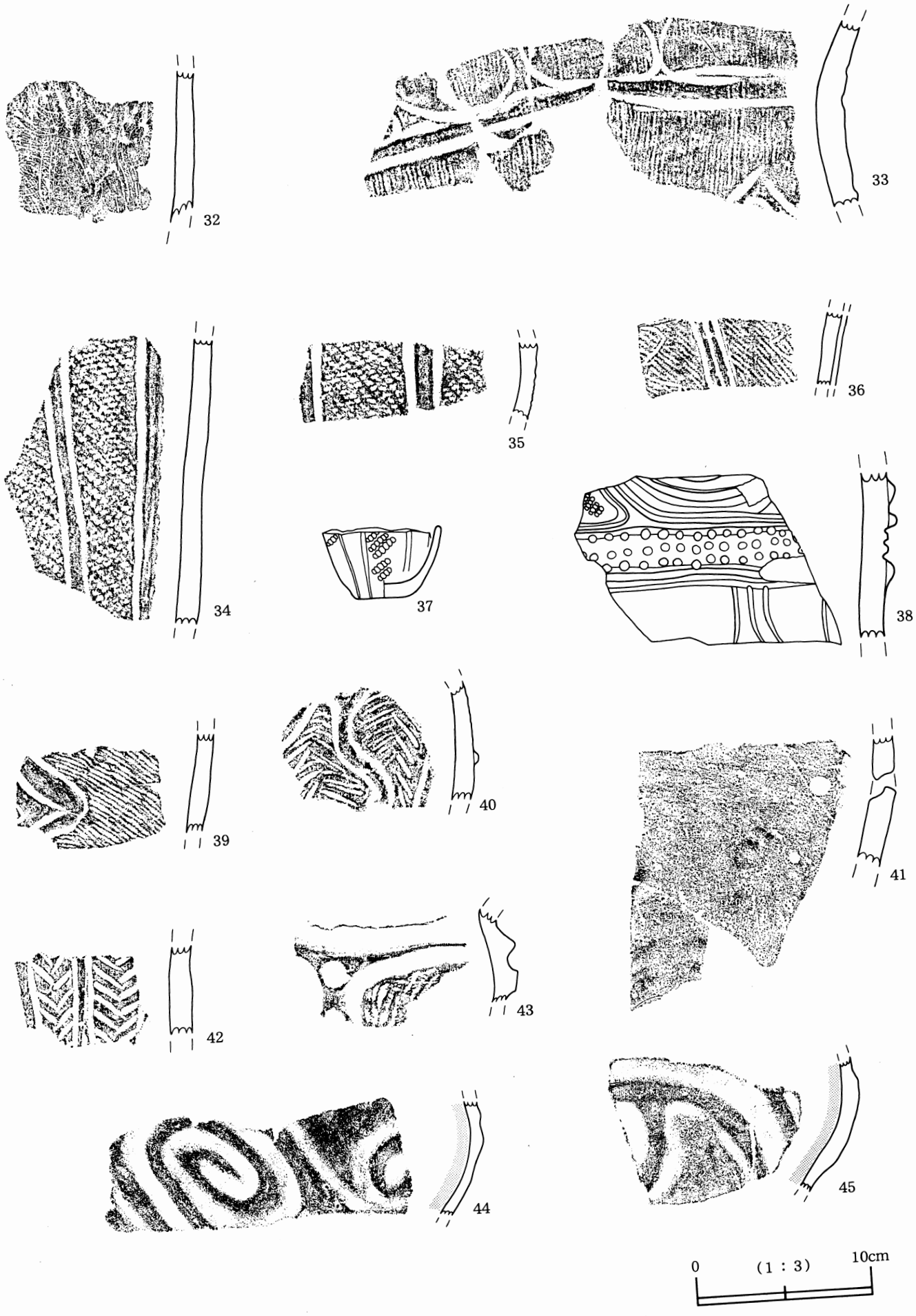
17

0 (1：3) 10cm

第10図　J－1号竪穴住居跡出土遺物(3)

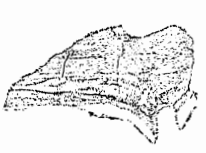


第11図　J－1号竪穴住居跡出土遺物(4)



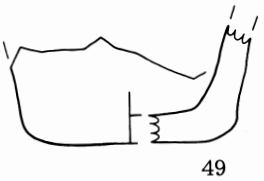
第12図　J－1号竪穴住居跡出土遺物(5)

46

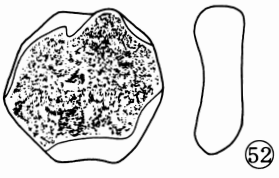


● 47

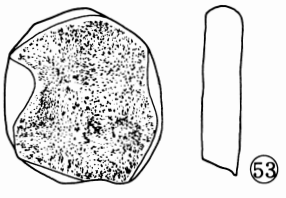
● 48



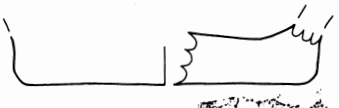
49



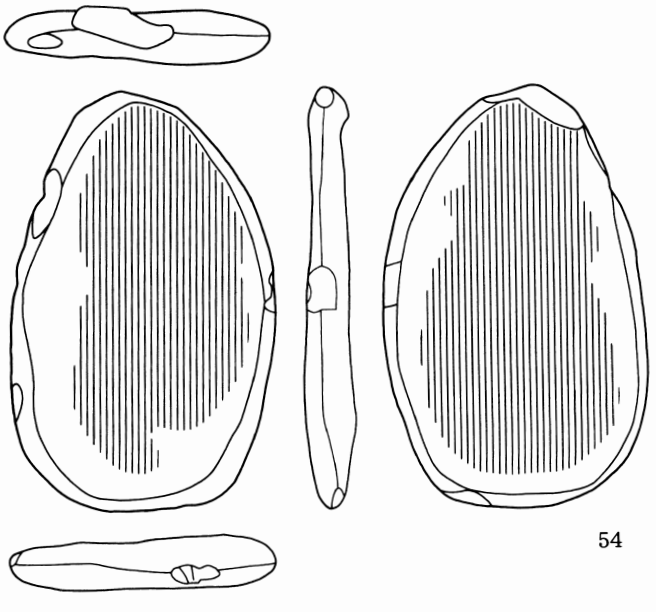
52



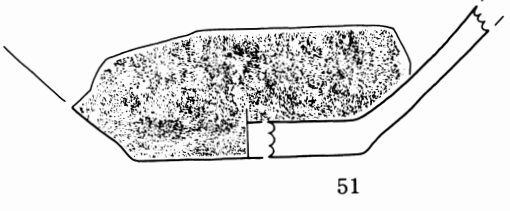
53



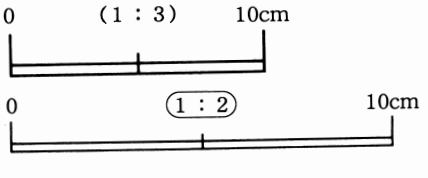
50



54



51



第13図　J－1号竪穴住居跡出土遺物(6)

石器について

角田真也・福田貫之

今回の整理作業は、縄文時代石器研究の一つの到達点である中野谷松原遺跡（大工原ほか1998）の報告書を参考にした。しかし、時間的余裕がない中でおこなったため、最低限の記載しかおこなっていない。

今回行った整理の方法を具体的に述べると、作図に関しては、遺構内出土のもののうち、石鏃と完形に近い打製石斧を実測したが、裏面は省略している。また、破損した打製石斧については、折れ（横からの力により打点なく折れたもの）・割れ（端部からの力により薄く剝離したもの）・擦れ（使用によるとみられる磨痕）を観察し、再調整とあわせてそのことのみを記載した。不定形石器と遺構外出土の石器については、表・図とも省略した。

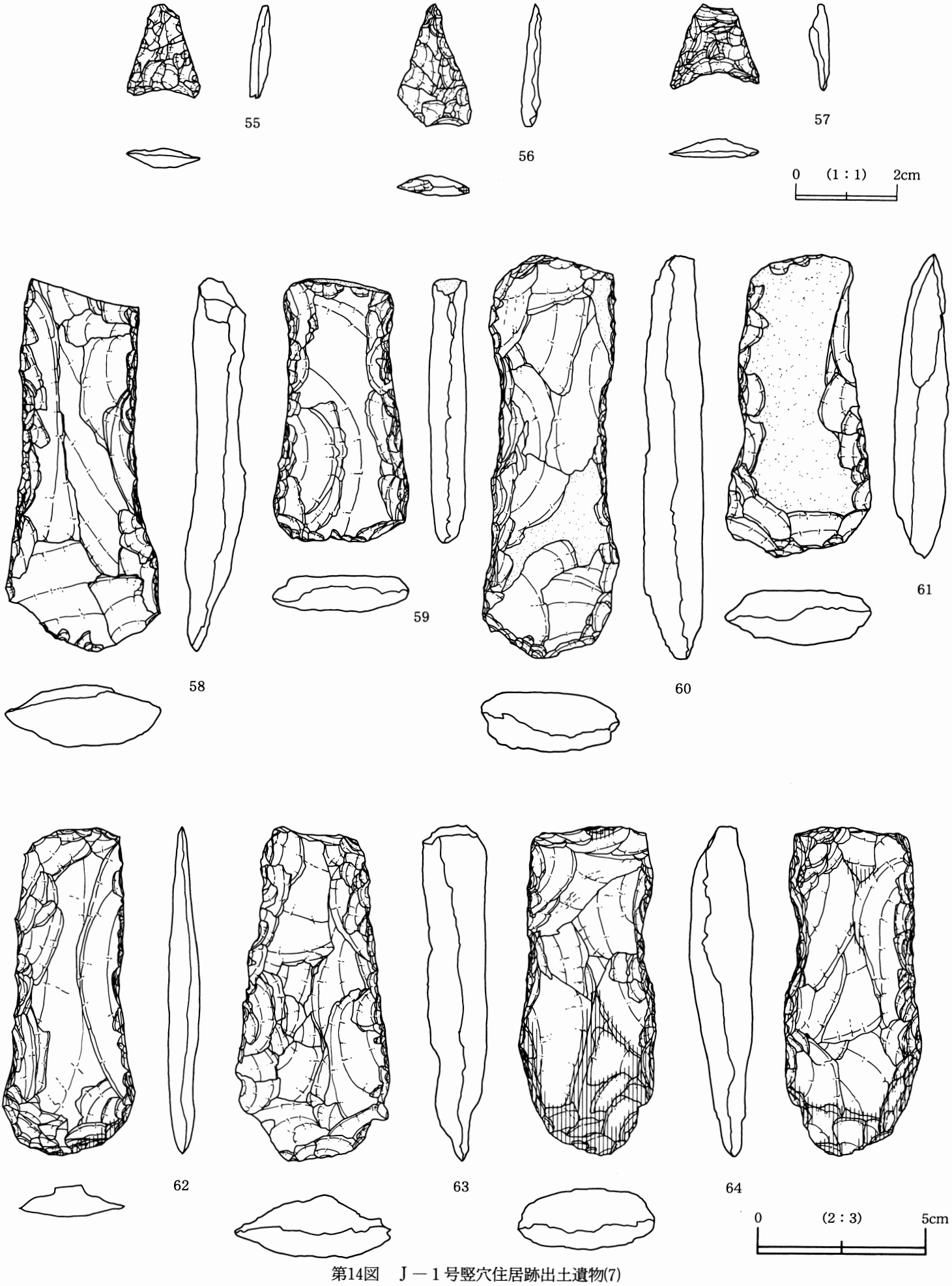
それでは以下、掲載してある石器について具体的に述べていくこととする。

55～57は、凹基無茎鏃である。55は、先端が破損しているが、剝離の方向や角度から見て、使用中何か硬いものが当たって破損したように見受けられる。56は、左右の逆刺が破損している。57は、先端部と左右の逆刺の端部が破損している。

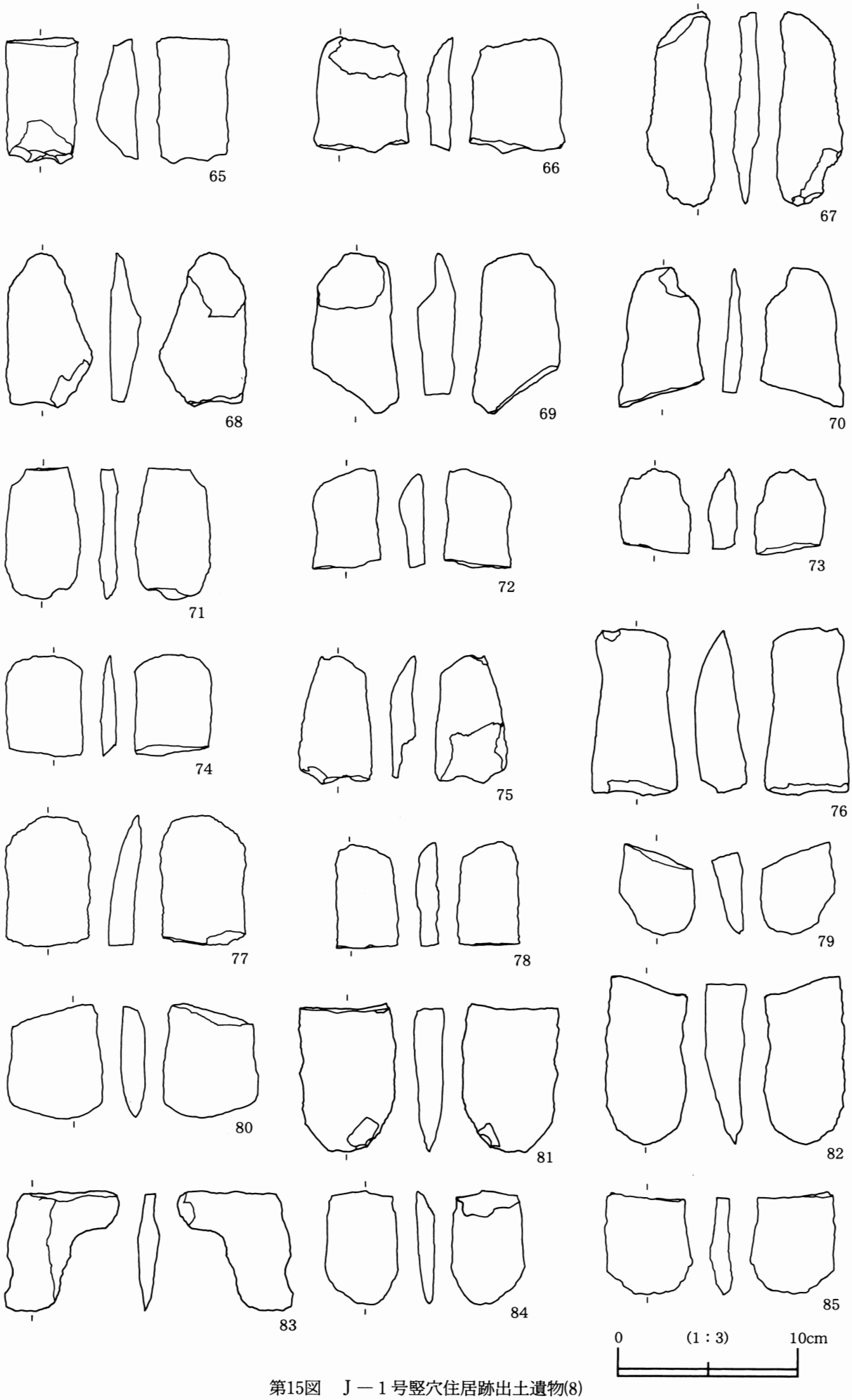
58以下は全て短冊形の打製石斧である。58は、表裏とも二次調整されており素材の形状は不明である。先端部に微細な剝離が見受けられるが、これは使用により先端が破損した後、再度使用された結果と考えられる。基部は斜めだが、使用中の折れ面であるとは断定できない。59は、裏側に主要剝離面を残し、横長傾向の不定形剝片を素材として用いたことが看取できる。使用により先端が破損したために寸詰まりの形状になったものと考えられる。60は、表側に原礫面を残すが、裏側は全体が二次調整されており、素材の形状は確認できない。礫素材もしくは原礫の表皮を残す剝片を素材としたものと考えられる。使用による磨痕が先端付近に見受けられるほかはほぼ完形である。61は、表側に原礫面、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いていることが看取できる。また、使用によるとみられる先端部の欠けが観察できる。62は、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いたことが看取できる。裏側の先端に使用時の磨痕が見受けられる。63は、表裏とも二次調整されており素材の形状は確認できない。表裏とも使用時のものと見られる磨痕が顕著に観察できる。表側基部よりにも磨痕が観察できる部位があることが特に注目される。これは、あるいは着柄に関わる使用痕かもしれないが、基部と先端部を入れ替えて使用していた可能性が高いものと考えられる。本来の刃は実測図の上側（基部）にあったのだろう。この実測図の上側（基部）は一度折れた後、再調整されている。破損により刃としての役を為さなくなったため上下を入れ替えられ、基部として再調整されたのであろう。64は、裏側に主要剝離面を残し、横長傾向の不定形剝片を素材としている。先端には使用による欠けが観察できる。

65は、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いたことが見受けられる。使用によるとみられる先端部の割れが観察できる。上端の折れも使用によるものと考えられる。66は、裏側に主要剝離面を残す。横長傾向の素材を用いたことが見受けられる。先端部に欠けが、上端に折れが観察されるが、使用によるものと考えられる。67は、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いたことが見受けられる。先端部の表裏とも使用によるものと見られる磨痕が、また基部よりにも表裏とも磨痕が観察できる。基部よりの磨痕は着柄に関わる使用痕であるものとみられる。先端部、基部ともに使用によるものとみられる割れが観察できる。68は、表側に原礫面、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いたと見受けられる。先端部の表裏ともに使用に

よるものとみられる磨痕が観察される。基部より先端部よりにそれぞれ使用によるものと考えられる割れがみられる。69は、表側に原礫面、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いたとみられる。基部に割れが、下端に使用によるものとみられる折れが観察できる。70は、表側に原礫面、裏側に主要剝離面を残し、横長傾向の素材を用いたことが見受けられる。先端部に割れが、上端に折れが観察できる。また、表側の先端部には使用によるものとみられる磨痕が見受けられる。71は、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いたことが見受けられる。表裏ともに先端部に使用によるものとみられる磨痕が観察できる。先端部に微細な剝離が見受けられ、先端が破損した後も再度使用したものと考えられる。基部よりには使用によるものとみられる折れが観察できる。72は、表側に原礫面、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いたことが見受けられる。裏側の基部よりに使用による磨痕がみられる。下端に使用によるものと思われる折れが観察できる。73は、表側に原礫面、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いたことが見受けられる。下端に折れが観察できる。基部が割れているが使用によるものとは思われない。74は、裏側に主要剝離面が残り、横長傾向の素材を用いたとみられる。下端で折れが観察できるが、使用によるものと思われる。基部よりの表裏に磨痕が観察できるが、裏側よりは表側のほうが磨痕の範囲が広い。着柄による可能性も考えられるが、63と同様に基部と先端部を入れ替えて使用したためとも考えられる。75は、表側に原礫面、裏側に主要剝離面を残し、横長傾向の素材を用いたとみられる。裏側に著しい割れが観察できるが、使用によるものとは断定できない。76は、表側に原礫面、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いたことが見受けられる。表裏とも基部よりに使用による磨痕が観察できるが、表側より裏側のほうが範囲が広い。下端に使用によるものとみられる折れと割れが確認できる。77は、表側に原礫面が残るが、裏側は不明である。表裏とも基部よりに使用による磨痕が観察できる。下端に使用による折れが確認できる。78は、表側に原礫面が残るが、裏側は全体が二次調整されており、素材の形状は確認できない。下端に使用によるものとみられる折れが確認できる。79は、裏側に主要剝離面が残り、横長傾向の素材を用いたことが見受けられる。先端には割れが観察できるが使用によるものとは断言できない。上端に使用によるとみられる折れが確認できる。80は、表側に原礫面、裏側に主要剝離面を残し、横長の素材を用いたことが看取できる。上端に使用による折れが観察できる。81は、裏側に主要剝離面が残り、横長傾向の素材を用いたと思われる。先端部は表裏ともに使用によるとみられる磨痕が広く確認でき、使用頻度の高さがうかがえる。上端の折れ、表裏先端部の割れは使用によるものとみられる。82は、表裏とも二次調整されており、素材の形状は確認できない。上端に使用によるとみられる折れが観察できる。83は、裏側に主要剝離面が残り、横長傾向の素材を用いたことが見受けられる。下端からの大きな割れが観察できる。幅広の打製石斧に大きな力が加わり剝離した可能性がある。上端の折れは使用によるものとは断定できない。84は、裏側に主要剝離面が残り、横長傾向の素材を用いたことが看取できる。上端の折れのほか表裏の先端部に磨痕が観察でき、使用によるものと思われる。85は、裏側に主要剝離面が残り、横長の素材を用いたとみられる。上端に使用によるとみられ折れが観察できる。



第14図　J－1号竪穴住居跡出土遺物(7)



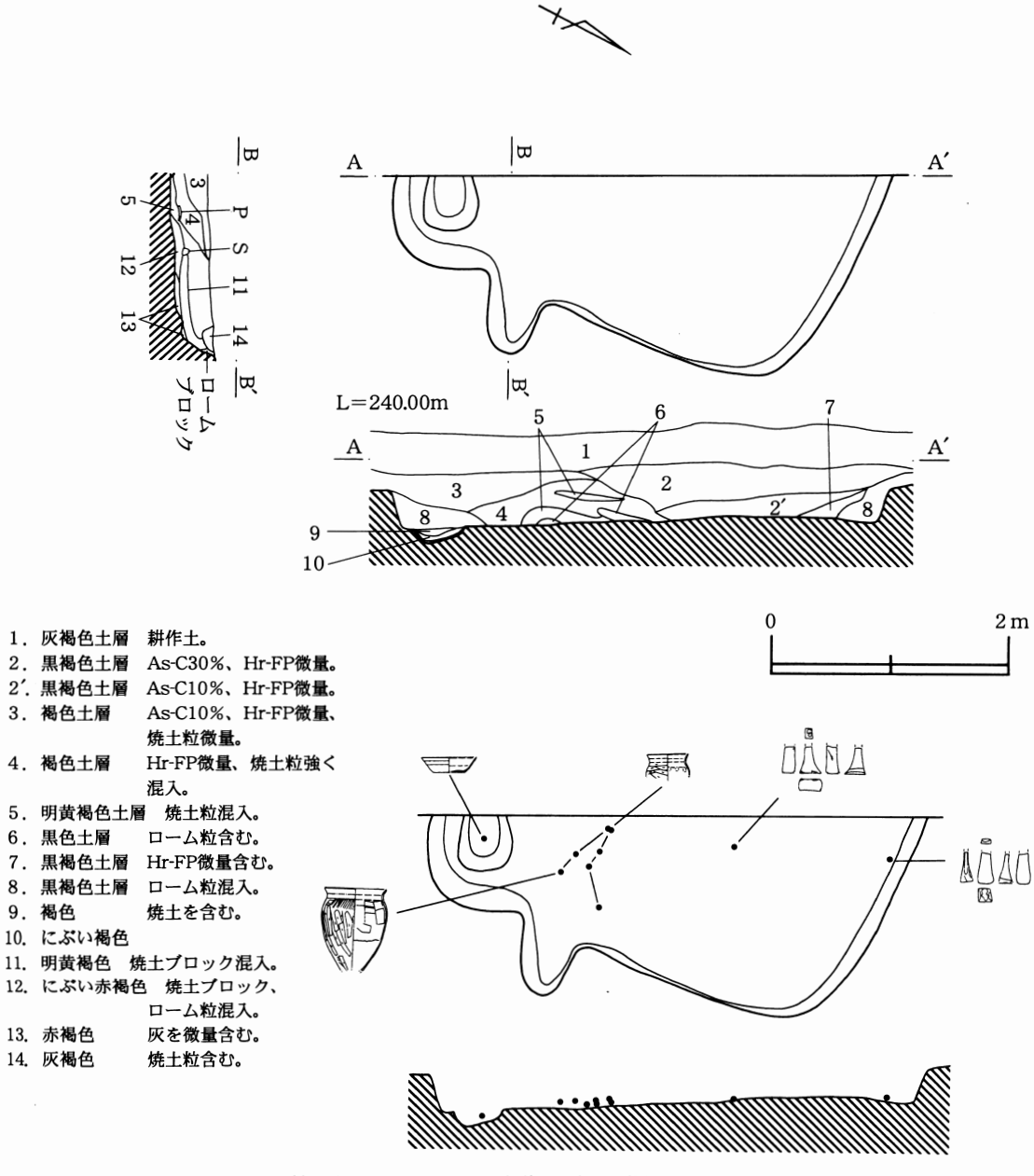
第15図　J－1号竪穴住居跡出土遺物(8)

H－1号竪穴住居跡

本住居跡は調査区の西端に位置し、大半は西側の調査区域外に伸びるため全容は不明である。南北3.70m、東西は1.70mの範囲を調査した。床面積は調査範囲で4.5㎡である。壁高は北壁0.27m、南壁0.31m、東壁0.25mを測る。主軸方位はN-85°-Eである。床面は平坦であり、竈の前面とその周辺は堅く踏み固められているが、北東壁付近は脆弱である。竈は主に粘土で構築されていたと思われ、東壁の南寄りに付設されている。壁ぎわから煙道先端部まで約0.7mを測る。南西隅から長径約0.5m、深さ約0.14mを測る貯蔵穴とみられる掘り込みが検出され、須恵器坏片が出土した。柱穴と壁溝は確認されなかった。

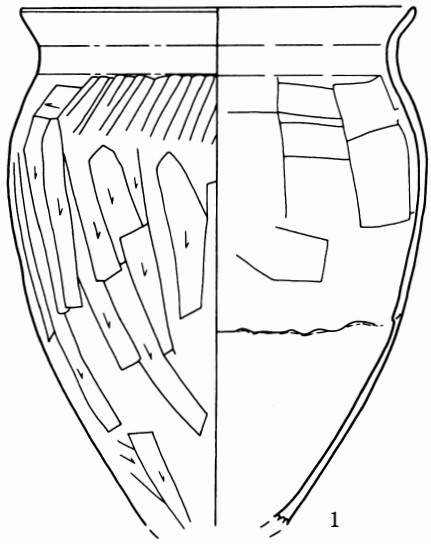
遺物は前述以外に、北壁ぎわから砥石2点と竈前面より長胴甕片、土師器坏片が出土した。出土した2点の砥石はともに半分が欠損した状態である。覆土中の遺物はごく少量である。

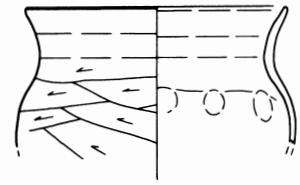
出土した遺物と住居の平面形態から、本住居跡は奈良時代に帰属される。

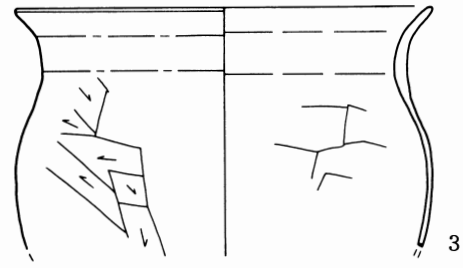


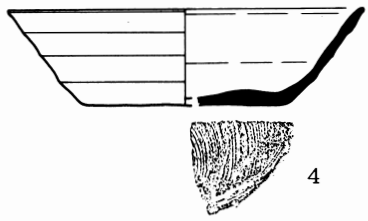
1．灰褐色土層　耕作土。
2．黒褐色土層　As-C30%、Hr-FP微量。
2′．黒褐色土層　As-C10%、Hr-FP微量。
3．褐色土層　As-C10%、Hr-FP微量、焼土粒微量。
4．褐色土層　Hr-FP微量、焼土粒強く混入。
5．明黄褐色土層　焼土粒混入。
6．黒色土層　ローム粒含む。
7．黒褐色土層　Hr-FP微量含む。
8．黒褐色土層　ローム粒混入。
9．褐色　焼土を含む。
10．にぶい褐色
11．明黄褐色　焼土ブロック混入。
12．にぶい赤褐色　焼土ブロック、ローム粒混入。
13．赤褐色　灰を微量含む。
14．灰褐色　焼土粒含む。

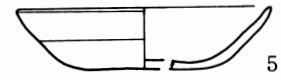
第16図　H－1号竪穴住居跡及び遺物分布図

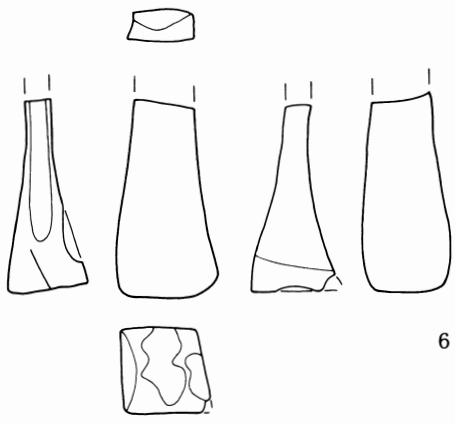


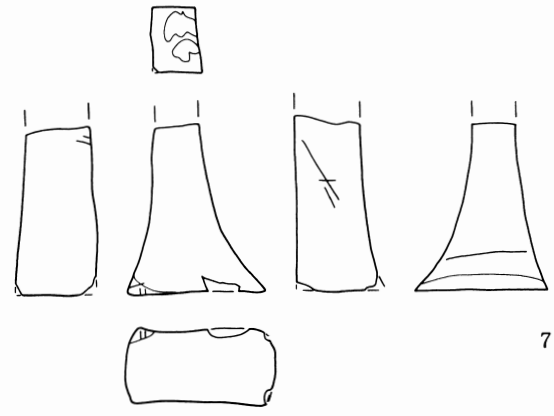


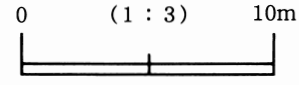








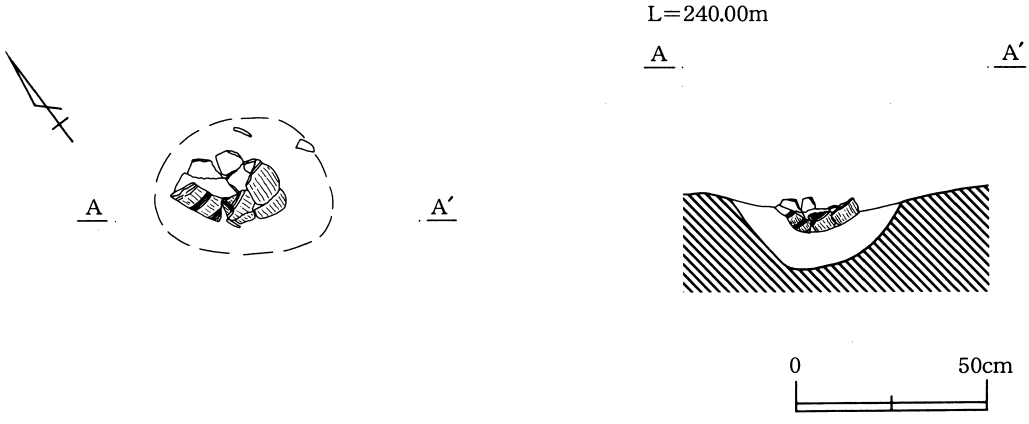




第17図　H－1号竪穴住居跡出土遺物

2．埋　甕

Ｊ－１号住居跡の南西、X3Y5グリッドに位置するところで１基の埋甕を検出した。表土掘削の際に確認されたため、平面形態は不明であるが、土層断面の観察から楕円形が推測される。土器はやや斜めに倒壊した状態で出土した。



第18図　１号埋甕

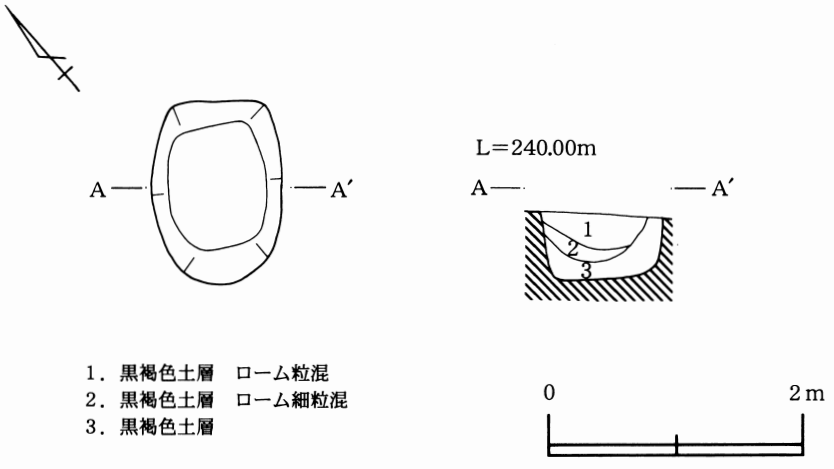
第19図　１号埋甕出土遺物

3．柱　穴

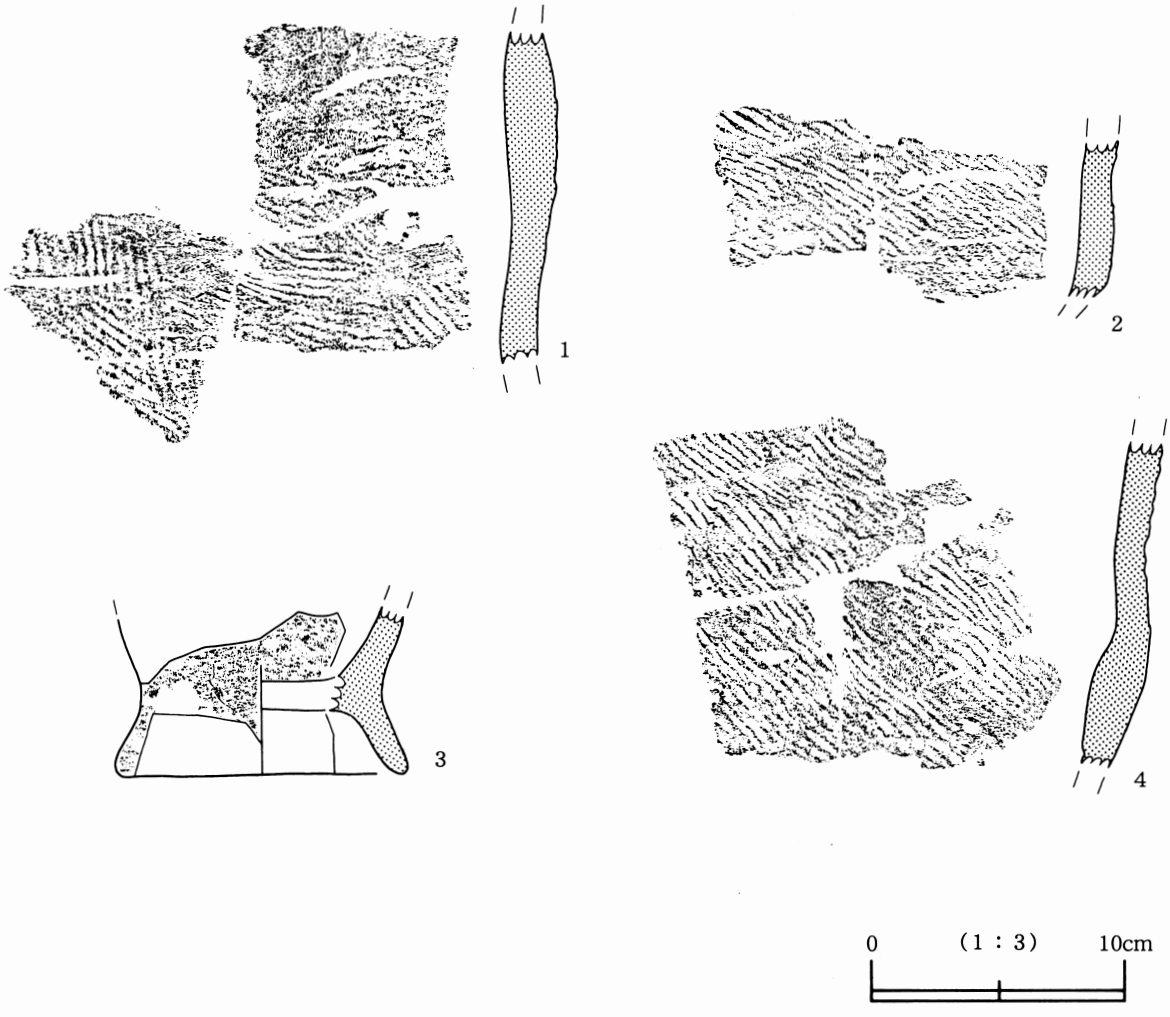
調査区からは、６基の柱穴が検出された。堀方と深さは共通せず、今回の調査範囲内では掘立柱建物跡とは認識できない。調査区外に伸びる柵列等が推測される。

4．土　坑

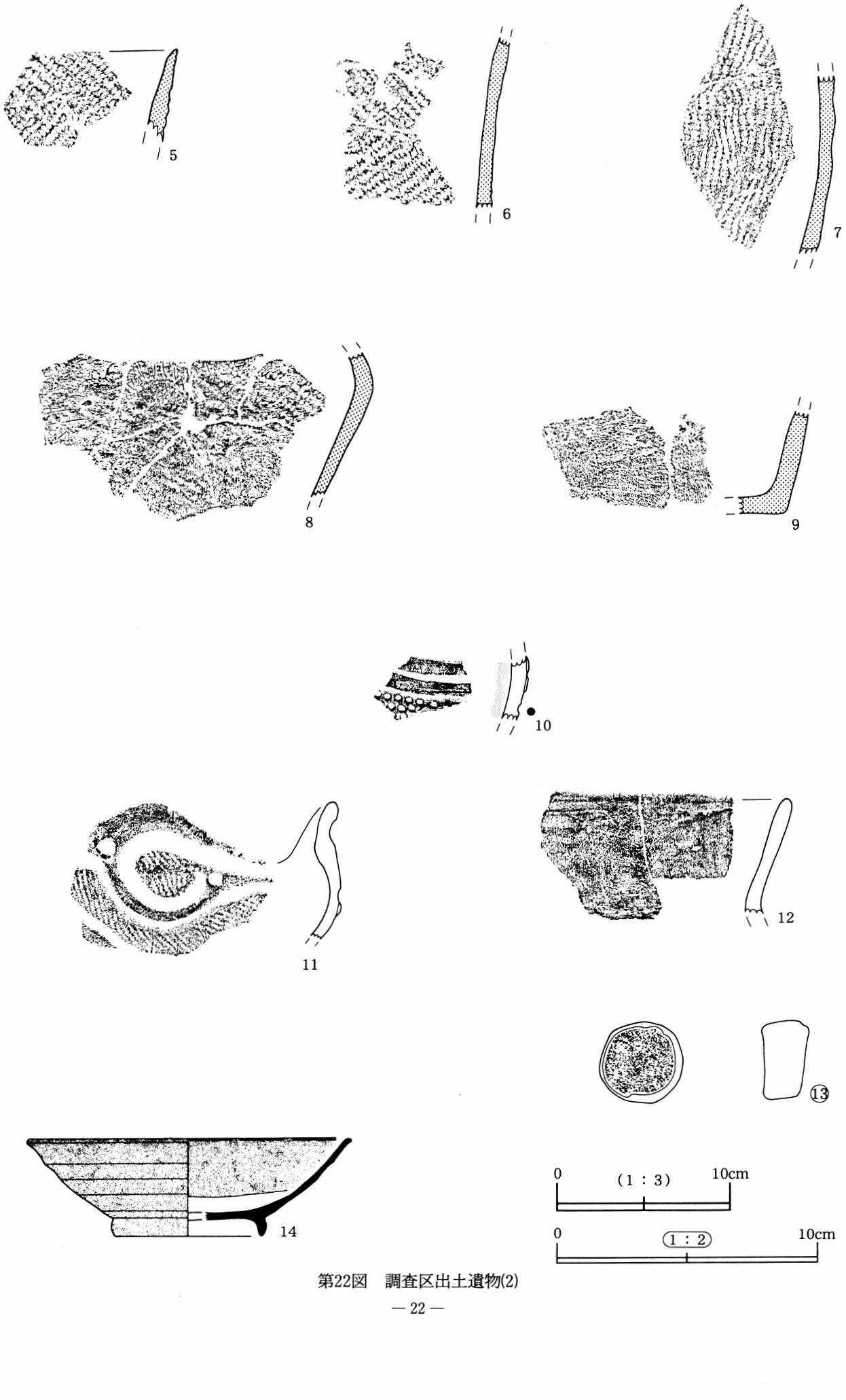
調査区からは、１基検出された。Ｊ－１号竪穴住居跡の南端で重複する。遺物は流れ込みとみられる縄文土器が少量出土するのみである。覆土が軽石を含まないことから、近世のものとみられる。



第20図　１号土坑



第21図　調査区出土遺物(1)



第22図　調査区出土遺物(2)

V　ま と め

縄文時代

今回の調査で得られた遺物のほとんどは縄文時代中期に帰属するもであるが、前期の遺物も若干含まれている。ただし、前期に帰属する遺構は検出されていない。出土状況も調査区から採集されるのみであるが、周辺には前期に属する遺構があるものと思われる。出土遺物は黒浜式と有尾式が占める。

中期の遺構は竪穴住居跡１軒と埋甕１基が検出された。竪穴住居跡は一部が調査区の北に伸びるため全てを調査したわけではないが、出土した遺物は土器を主体に多量であった。遺物の大半は覆土の上層と下層の２層から出土しており、さらに詳細に検討すると、下層よりも上層の方が出土遺物量が多い傾向にあり、若干ではあるが時期差が認められた。その他に覆土より微量であるが炭化物が確認されたため、有機質の遺物が存在していた可能性がある。同時に極めて微量であるが焼土も確認されているため、有機質の遺物は廃棄時に焼却されていたのかもしれない。石囲埋甕炉内からは炭化物や焼土は極めて少量であるため、火勢や使用時間は短かったのかもしれない。石囲埋甕炉の南で検出された集結した礫は台石である可能性がある。

住居跡から出土する遺物は、床面出土あるいは特殊な事例を除いて住居廃絶後に外部から廃棄されたものであることは、常々指摘されているところである。本住居跡は、床面からの遺物は極めて少量であるが、石囲埋甕炉が残存していたため廃絶時期は加曾利Ｅ３末であることが推測される。

埋甕はＪ－１号住居跡の南西約１m付近で確認されたが、平面形態は明確には捉えることができなかった。また、Ｊ－１号住居跡とは時期的に差が見られる。

奈良時代

奈良時代に帰属する遺構はＨ－１号住居跡のみであるが、調査区周辺には当該期のほか平安時代に帰属するとみられる遺物が散布しており、広範囲に広がる集落の南端の一部とみられる。住居跡内からは柱穴は確認されなかったが、屋外柱や土壁の存在が考えられる。また、砥石が出土したことから、鉄製品の存在を伺わせる。ところで、本遺跡は周辺の谷地部からは比高差のある丘陵に位置しており、周囲に水田可耕地を備えているとは言い難い。丘陵の東西の谷地部で小規模な水稲耕作が行われた可能性はあるが、それだけで集落を維持したとは考えられない。本遺跡周辺の調査が進んでいない現状においては、周辺の様相は不明であるが、谷を挟んで東側の丘陵に位置する小原目遺跡からは、時期的に若干後出する集落が調査されており、鍛冶遺構が検出されている。また、本遺跡の北方にある漆窪上漆窪遺跡からは円面硯が出土し、方形の区画溝が確認されていることから、本遺跡周辺は鍛冶遺構を統括する官人の所在地であったのかもしれない。

Ｊ－１号住居跡出土遺物観察表（土器・土製品）※（ ）は現存値を、［ ］は復元値を表す。数値の単位はcmである。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
1	深鉢	口径 17.2 器高(13.9) 底径 —	①細砂、石英、白色粒子。 ②2.5YR 6/8 ③やや良好。	口縁部に横位沈線、２条の縦位蛇行沈線・縦位沈線、櫛条工具による縦位波状沈線文。頸部は横位の交互刺突文を施した隆帯。胴部は２条の縦位蛇行地線・縦位沈線、櫛条工具による縦位波状沈線。	石囲埋甕炉。胴部より下を欠く。
2	深鉢	口径[38.0] 器高 — 底径 —	①中砂、石英。 ②7.5YR 4/4 ③良好。	口縁部外面肥厚。隆帯による渦巻き状文で区画し、矢羽状沈線を充填する。隆帯下部に縦位、斜位沈線を施す。	口縁部 1/4 残存。
3	深鉢	口径[35.0] 器高 — 底径 —	①中砂、石英、輝石少量。 ②10YR 6/2 ③やや良好。	隆帯による繋ぎ弧文、区画内に矢羽状沈線を充填。口縁部文様帯下に２条の沈線を垂下し、矢羽状沈線を充填。	口縁から胴部にかけて 2/5 残存。
4	深鉢	口径 — 器高(21.7) 底径 8.2	①細砂、石英、小礫。 ②2.5YR 6/6 ③良好。	底部から胴部上位にかけて２条と３条の縦位沈線。地文は LR 縄文。内面は丁寧な磨き。底部は欠く。頸部の断面は削られている。	胴部のみ残存。
5	深鉢	口径[19.8] 器高 30.1 底径 8.0	①中砂、石英、輝石。 ②2.5YR 4/6 ③良好。	全体に縦位条線を施す。頸部は交互刺突文を加えた平行沈線。胴部に２条の横位波状沈線。	口縁から底部にかけて 1/4 残存。
6	深鉢	口径 27.5 器高 — 底径 —	①細砂、石英、白色粒子。 ②5YR 4/4 ③やや良好。	口縁部に２条の横位沈線を巡らし、円形の連続刺突文を充填。２条の沈線あるいは１条の沈線により、逆Ｕ字状文。地文は LR 縄文。	口縁から胴部にかけて 1/3 残存。
7	有孔鍔付	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、輝石少量。 ②5YR 5/1 ③良好。	頸部で強く直立。頸部で鍔状の隆帯が巡る。内外面ともに丁寧に磨く。内外面に赤彩痕。	口縁のみ残存。８と同一個体。
8	有孔鍔付	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、輝石少量。 ②5YR 6/1 ③良好。	弧状の鍔状隆帯。隆帯によりブリッジ状を呈する。内外面ともに丁寧に磨く。内外面に赤彩痕。	胴部のみ残存。７と同一個体。
9	深鉢	口径 — 器高(24.5) 底径 8.3	①中砂、石英、輝石、白色粒子。 ②7.5YR 4/3 ③やや良好。	頸部に横位の沈線が巡る。胴部から底部にかけて沈線により逆Ｕ字状文。地文は RL 縄文。補修孔あり。	頸部から底部にかけて 1/2 残存。
10	深鉢	口径[38.0] 器高 — 底径 —	①中砂、石英、白色粒子多い。 ②5YR 5/6 ③やや不良。	隆帯による文内は刺突文で充填。口縁部文様体下部に沈線間を磨り消した垂下文。地文は LR 縄文。	口縁部から胴部にかけて 1/5 残存。
11	深鉢	口径 — 器高 — 底径 6.5	①細砂、輝石、赤褐色粒子。 ②7.5YR 7/4 ③やや良好。	２条の縦位沈線、１条の蛇行沈線が垂下。地文は RL 縄文。	底部から胴部下部のみ残存。
12	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英・白色粒子多い。 ②2.5YR 5/8 ③良好。	横位の沈線をめぐらし、その下に沈線による３条１組の横位連弧文を２単位施す。地文は LR 縄文。内面に煤付着。	胴部のみ 2/3 残存。
13	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、輝石、白色粒子多い。 ②7.5YR 7/6 ③やや不良。	３条の縦位沈線と２条の縦位波状沈線を施す。地文は LR 縄文。	胴部のみ 2/3 残存。
14	鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、輝石、赤褐色粒子。 ②2.5YR 5/6 ③やや良好。	隆帯により大柄の渦巻文と小柄の渦巻文を中心に、隅丸方形の区画を配す。外面は丁寧な磨き。外面全体に赤彩痕。	胴部のみ 1/4 残存。
15	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、輝石、白色粒子。 ②5YR 3/4 ③良好。	波状口縁。突起部外反。沈線による渦巻文。沈線による横位楕円文内を RL 縄文で充填。	破片資料(口縁)。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
16	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、赤褐色粒子。 ②10YR 6 / 4 ③やや良好。	波状口縁。隆帯による渦巻きつなぎ弧状区画文内を縦位沈線で充填。渦巻きから隆帯による垂下文。LR 縄文で充填。	破片資料(口縁)。
17	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、赤褐色・白色粒子。 ②10YR 7 / 6 ③良好。	波状口縁。口縁はやや内傾する。口縁部文様帯は隆帯により円形と長方形で構成。胴部は 2 条の沈線を垂下。LR 縄文を充填。	破片資料(口縁)。
18	浅鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、小礫、石英多い。 ②5YR 6 / 6 ③良好。	口縁部肥厚。外面に赤彩痕。	破片資料(口縁)。
19	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、輝石、石英・白色粒子多い。 ②7.5YR 4 / 6 ③やや良好。	口縁部強く内傾。 2 状の横位沈線。 2 条の縦位沈線と逆U字状沈線が垂下。LR 縄文を充填。	破片資料(口縁)。
20	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、輝石、石英、白色粒子多い。 ②10R 3 / 6 ③やや不良。	隆帯による状の楕円区画内を縄文で充填。隆帯下部に 2 条の沈線が垂下。	破片資料(口縁)。
21	浅鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、白色粒子。 ②10YR 7 / 4 ③良好。	頸部に横位の隆帯。横位隆帯から縦位隆帯が垂下する。内外面に丁寧な磨き。外面に赤彩痕。	破片資料(頸部)。
22	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、白色粒子。 ②10YR 5 / 4 ③やや良好。	口縁部やや外傾。隆帯による横位区画文内を矢羽状沈線で充填。内面丁寧な磨き。	破片資料(口縁)。
23	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、輝石、白色粒子。 ②2.5YR 5 / 8 ③やや良好。	隆帯による渦巻き文、横位区画文内を LR 縄文で充填。	破片資料(口縁)。
24	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、白色粒子。 ②2.5YR 3 / 6 ③やや良好。	口縁部やや肥厚。沈線による横位楕円区画文内を RL 縄文を充填。	破片資料(口縁)。
25	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、白色粒子多い。 ②10YR 6 / 4 ③やや不良。	口縁部肥厚、やや内傾。横位隆帯下に沈線。LR 縄文を充填。	破片資料(口縁)。
26	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、輝石、白色粒子。 ②5YR 2 / 3 ③やや不良。	口縁やや内傾。沈線による楕円区画文内を RL 縄文で充填。下部に横位沈線。	破片資料(口縁)。
27	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、輝石。 ②10R 4 / 6 ③良好。	隆帯による楕円区画文内を斜位沈線で充填。隆帯脇に沈線。判読不明の縄文を充填する。	破片資料(口縁)。
28	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、輝石。 ②10YR 6 / 4 ③良好。	隆帯による区画文内に矢羽状沈線を充填。内面は丁寧な磨き。補修孔あり。内面に彩色の痕跡。	破片資料(口縁)。
29	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、輝石。 ②7.5YR 4 / 2 ③やや良好。	沈線により弧状、横位施文。地文は撚糸 1 。	破片資料(胴部)。
30	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、輝石、軽石。 ②10YR 5 / 3 ③やや良好。	横位の連弧状沈線。地文は撚糸 1 。	破片資料(胴部)。
31	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、輝石、小礫。 ②5YR 5 / 6 ③やや良好。	横位沈線と斜位沈線の間に円形の刺突文。地文は LR 縄文。内面は丁寧な磨き。LR 縄文上に赤彩痕。	破片資料(胴部)。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
32	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、輝石、石英多い。 ②10R 4/8 ③良好。	櫛条工具による波状沈線文。	破片資料(胴部)。
33	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、小礫、石英多い。 ②2.5YR 5/8 ③やや不良。	頸部に2条の沈線。上部には沈線による楕円、下部には斜位の沈線。地文は撚糸1。	破片資料(頸部)。
34	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、輝石。 ②5YR 4/2 ③やや良好。	2条一組の沈線が垂下する。地文はRLR縄文。	破片資料(胴部)。35と同一個体。
35	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、輝石。 ②5YR 4/2 ③やや良好。	2条一組の沈線が垂下する。地文はRLR縄文。	破片資料(胴部)。34と同一個体。
36	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、輝石。 ②2.5YR 5/8 ③良好。	中心に縦位沈線を施した隆帯が垂下。隆帯測線は沈線。隆帯の両脇に蛇行沈線が垂下する。地文はRL縄文。	破片資料(胴部)。
37	深鉢	口径 — 器高 (3.8) 底径 2.8	①細砂、輝石少量。 ②7.5YR 8/3 ③やや良好。	2条一組の沈線が垂下する。地文はLR縄文。 ミニチュア土器	底部から胴部にかけて残存。
38	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、輝石多い。 ②2.5YR 2/2 ③良好。	胴部上位の2条の隆帯によって画された帯状分線帯。上位は弧線状の意匠文と区画文。隆帯測線は沈線。区画内はLR縄文を充填。下位は沈線の懸垂文。	破片資料(胴部)。
39	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、輝石。 ②5YR 6/6 ③やや良好。	3条の沈線が屈曲して垂下。地文はRL縄文。	破片資料(胴部)。
40	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、輝石、小礫。 ②2.5YR 5/8 ③やや不良。	蛇行し垂下する隆帯。隆帯測線は沈線。隆帯による区画内を矢羽状沈線で充填。	破片資料(胴部)。
41	浅鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、小礫、石英多い。 ②5YR 6/8 ③やや良好。	補修孔あり。方向を変えて2回にわけて穿孔。付近に穿孔途中の痕跡が2ケ所。	破片資料(胴部)。
42	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英。 ②7.5YR 5/3 ③良好。	2条一組の沈線が垂下。間を矢羽状沈線で充填。	破片資料(胴部)。
43	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、石英、小礫少量。 ②7.5YR 3/3 ③良好。	隆帯により楕円状区画文内を縄文で充填する。隆帯の交点に円形の連続刺突文。	破片資料(胴部)。
44	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、輝石、赤褐色粒子。 ②2.5YR 3/3 ③やや良好。	隆帯による楕円形渦巻文。内面に赤彩痕。	破片資料(胴部)。45と同一個体。
45	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、輝石、赤褐色粒子。 ②5YR 5/6 ③やや良好。	隆帯による楕円形渦巻文。内面に赤彩痕。	破片資料(胴部)。44と同一個体。
46	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂、輝石、赤褐色・白色粒子。 ②10YR 6/4 ③やや不良。	隆帯による大柄渦巻文、縦位隆帯間を縦位、斜位沈線で充填。	破片資料(胴部)。
47	浅鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、輝石。 ②7.5YR 4/2 ③やや不良	頸部は沈線による弧状。内外面は丁寧な磨き。外面赤彩、内面屈曲部より上に赤彩。	破片資料(胴部)。48と同一個体。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
48	浅鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、石英、輝石。 ②7.5YR 4/2 ③やや不良。	内外面は丁寧な磨き。外面赤彩、内面屈曲部より上に赤彩。	破片資料(胴部)。47と同一個体。
49	深鉢	口径 — 器高 — 底径 6.4	①中砂、石英。 ②5YR 7/6 ③やや不良。	底部から胴部にかけて外傾するように立ち上がる。	底部から胴部下部にけて残存。
50	深鉢	口径 — 器高 — 底径 11.1	①中砂、石英、軽石。 ②2.5YR 4/8 ③やや良好。	外傾するように立ち上がる。底部に網代痕。	底部のみ1/4残存。
51	浅鉢	口径 — 器高 — 底径 [9.2]	①中砂、石英、白色粒子多い。 ②10YR 8/4 ③良好。	底部から胴部にかけて大きく開くように立ち上がる。	底部から胴部にかけて1/3残存。
52	土製円盤	直径 4.1 厚さ 1.3	①中砂、石英。 ②2.5YR 3/6 ③良好。		
53	土製円盤	直径 4.5 厚さ 1.1	①細砂、石英、輝石、小礫。 ②7.5YR 8/8 ③やや良好。		

J－1号住居跡出土石器観察表

番号	器種	形態	色調	長さ	幅	厚さ	重量	備考
54	磨石	楕円形	10GY 6/1	16.4cm	10.3cm	2.0cm	528g	
55	石鏃	凹基長方形	5Y 4/1	1.7cm	1.8cm	0.4cm	0.8g	
56	石鏃	凹基	7.5Y 4/1	2.4cm	1.5cm	0.4cm	1.1g	
57	石鏃	凹基長方形	5Y 4/1	1.8cm	1.5cm	0.4cm	0.9g	
58	打製石斧	短冊形	2.5Y 6/3	11.3cm	4.7cm	1.9cm	86g	
59	打製石斧	短冊形	5Y 5/1	8.0cm	4.1cm	1.2cm	48g	
60	打製石斧	短冊形	N 3/0	12.2cm	5.2cm	1.8cm	116g	
61	打製石斧	短冊形	7.5Y 5/1	9.2cm	4.4cm	1.6cm	78g	
62	打製石斧	短冊形	5Y 6/1	11.0cm	4.1cm	1.0cm	52g	
63	打製石斧	短冊形	5Y 6/1	10.0cm	4.1cm	1.9cm	89g	
64	打製石斧	短冊形	5Y 6/1	10.2cm	4.7cm	1.9cm	91g	
65	打製石斧		7.5Y 6/1	7.0cm	4.0cm	2.4cm	85g	
66	打製石斧		7.5Y 7/1	6.4cm	5.3cm	1.4cm	65g	
67	打製石斧		N 4/0	10.8cm	3.8cm	1.5cm	72g	
68	打製石斧		N 3/0	8.6cm	4.9cm	1.7cm	76g	
69	打製石斧		5Y 5/1	9.0cm	4.9cm	2.1cm	106g	
70	打製石斧		5Y 5/1	7.8cm	4.8cm	1.1cm	41g	
71	打製石斧		5Y 6/1	7.3cm	4.2cm	1.1cm	40g	
72	打製石斧		N 3/0	5.6cm	3.8cm	1.4cm	35g	

J－1号住居跡出土石器観察表

番号	器種	形態	色調	長さ	幅	厚さ	重量	備考
73	打製石斧		5Y 6/1	4.8cm	4.0cm	1.6cm	37g	
74	打製石斧		5Y 6/1	5.6cm	4.4cm	0.9cm	34g	
75	打製石斧		7.5Y 5/1	7.1cm	4.1cm	1.4cm	44g	
76	打製石斧		7.5Y 5/1	9.3cm	4.8cm	2.8cm	160g	
77	打製石斧		2.5Y 5/3	7.2cm	4.8cm	2.1cm	51g	
78	打製石斧		5Y 5/2	5.8cm	3.5cm	1.2cm	37g	
79	打製石斧		7.5Y 6/1	5.1cm	4.2cm	1.7cm	46g	
80	打製石斧		5Y 6/1	6.4cm	5.4cm	1.8cm	82g	
81	打製石斧		5Y 5/2	8.3cm	5.5cm	1.7cm	93g	
82	打製石斧		7.5Y 5/1	9.4cm	4.6cm	2.3cm	106g	
83	打製石斧		2.5Y 5/3	6.8cm	6.5cm	1.2cm	39g	
84	打製石斧		5Y 5/1	6.5cm	4.1cm	1.1cm	32g	
85	打製石斧		5Y 5/1	5.8cm	4.9cm	1.2cm	59g	

H－1号住居跡出土土器一覧表

※（ ）は現存値を、[ ] は復元値を表す。数値の単位はcmである。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
1	土師器甕	口径[20.6] 器高 23.3 底径 —	①細砂、石英。 ②5YR 5/6 ③良好。	外面 口縁部横撫で、体部は縦方向の箆削り。 内面 口縁部横撫で、体部は横方向の箆撫で、体部中位に輪積み痕。	口縁部から胴部1/2残存。底部欠失。
2	土師器小型甕	口径 13.6 器高 — 底径 —	①細砂、石英。 ②2.5YR 5/4 ③やや良好。	外面 口縁部横撫で、体部は横、斜め方向の箆削り。 内面 口縁部横撫で、肩部に指頭圧痕。	口縁部3/4、胴部1/4残存。
3	土師器甕	口径[21.8] 器高 — 底径 —	①細砂、石英。 ②2.5YR 6/8 ③やや不良。	外面 口縁部横撫で、体部は横、斜め方向の箆削り。 内面 口縁部横撫で、体部は横方向の箆撫で。	口縁部1/5、体部1/5 残存。
4	須恵器坏	口径[13.8] 器高 3.8 底径 [7.6]	①細砂、小礫。 ②7.5Y 6/1 ③良好。	外面 体部轆轤整形、底部糸切り痕。 内面 轆轤整形。	底部から胴部にかけて1/4残存。
5	土師器坏	口径 [9.8] 器高 3.4 底径 [7.6]	①細砂、石英。 ②2.5YR 6/8 ③良好。	外面 口縁部横撫で、以下箆削り。 内面 口縁部から体部横撫で、底部横撫で。	底部から胴部にかけて1/4残存。

H－1号住居跡出土石器一覧表

6	石製品砥石	長さ(7.7) 幅4.1 厚さ3.1 重量107g 石材 砥沢石	4面を使用。端部を欠く。	1部欠。
7	石製品砥石	長さ(6.7) 幅5.4 厚さ3.2 重量133g 石材 砥沢石	4面を使用。端部を欠く。	1部欠。

1号埋甕

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
1	深鉢	口径 — 器高(22.0) 底径 11.4	①細砂、石英、輝石。 ②10R 4/8 ③良好。	半截工具による沈線を横位にめぐらし、間にクランク状文を4単位施す。地文はRL縄文。	底部から胴部のみ残存。

遺構外出土遺物

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	文様、成・整形の特徴	備考
1	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂 ②5YR 3/4 ③良好	地文はR縄文。	繊維土器 破片資料(胴部)
2	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂 ②5YR 4/6 ③良好	地文はR縄文。	繊維土器 破片資料(胴部)
3	深鉢	口径 — 器高 — 底径 10.9	①細砂 ②7.5YR 6/6 ③良好	高台部破片。	繊維土器 底部1/3残存
4	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂 ②5YR 5/4 ③良好	地文はR縄文。	繊維土器 破片資料(胴部)
5	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、輝石 ②5YR 4/4 ③良好	地文はLR・RLの羽状縄文。	繊維土器 破片資料(口縁部)
6	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂 ②5YR 5/4 ③良好	地文はLR・RLの羽状縄文。	繊維土器 破片資料(胴部)
7	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂 ②5YR 4/3 ③良好	地文はL縄文。	繊維土器 破片資料(胴部)
8	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	① ②5YR 3/6 ③良好	地文はL縄文。	繊維土器 破片資料(頸部)
9	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂 ②2.5YR 5/8 ③良好	地文は不明。	繊維土器 破片資料(底部)
10	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂 ②5YR 6/6 ③良好	隆帯による円形区画状文。隆帯間は沈線を施す。隆帯に沿うように円形刺突文。内外面を丁寧に磨く。内外面に赤彩痕。	破片資料(胴部)
11	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①中砂 ②2.5YR 6/8 ③良好	波状口縁。隆帯による円形区画状文、円形の刺突文を施文。RL縄文を充填。	破片資料(口縁部)
12	深鉢	口径 — 器高 — 底径 —	①細砂、輝石 ②5YR 6/8 ③良好	頸部で強く外傾する。	破片資料(口縁部)
13	土製円盤	直径 3.1 厚さ 1.8	①細砂 ②7.5YR 7/4 ③良好		
14	灰釉陶器 椀	口径[18.6] 器高 5.7 底径 8.6	①細砂 ②7.5Y 8/1 ③良好	口縁端部は外反。口縁から底部まで灰釉。高台はやや丸みを帯びた三日月高台。	底部から口縁にかけて1/3残存。

発掘調査報告書抄録

フ リ ガ ナ	ヒキダタカゼキイセキ
書 名	引田高堰遺跡
副 書 名	送電線建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編 著 者 名	福田 貫之
編 集 機 関	富士見村遺跡調査会
編集機関所在地	〒371-0114 群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1 ☎027（288）6111
発 行 年 月 日	平成13年9月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 m²	調査面積	調査原因
ひきだたかぜき 引田高堰遺跡	ぐんまけんせたぐん 群馬県勢多郡 ふじみむらおおあざ 富士見村大字 うるしくぼあざひがししゅくはら 漆窪字東宿原	10303	村—11	36° 27′ 23″	139° 04′ 23″	20001124 ～ 20001225	121	送電線新設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
引田高堰遺跡	集落	縄文	竪穴住居 1軒	土器、石器	
		平安	竪穴住居 1軒	土師器、須恵器、石器	
		近世	土坑 1基		

調査区全景

Ｊ－１号住居跡全景

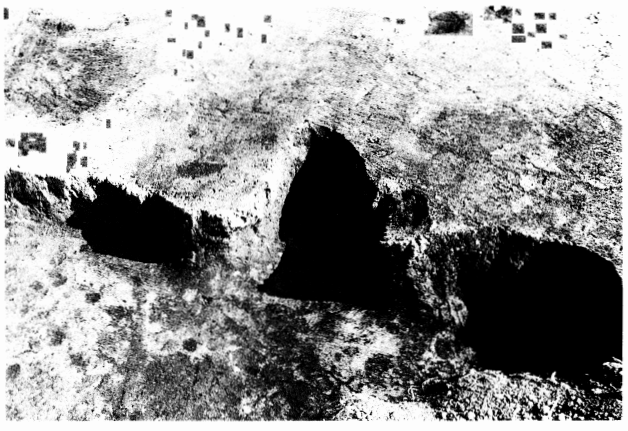
Ｊ－１号住居跡遺物出土状況

Ｊ－１号住居跡石囲炉全景

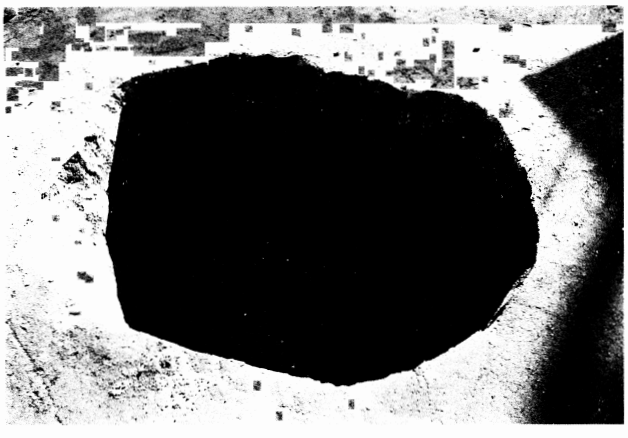
Ｊ－１号住居跡石囲炉・集石全景

PL　2

H－１号住居跡全景

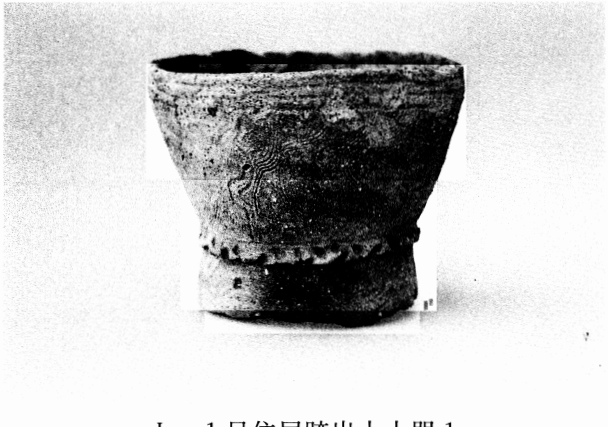


H－１号住居跡カマド全景

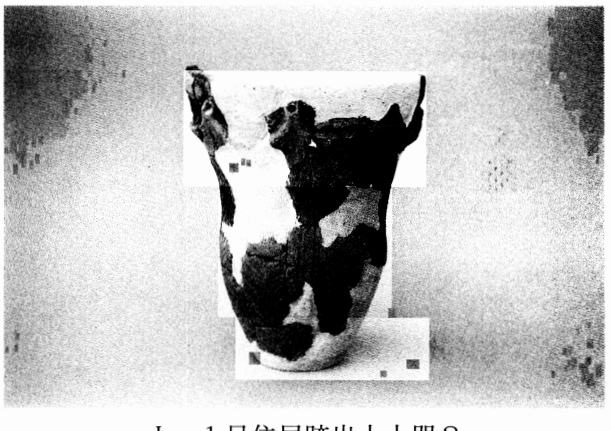


１号土抗全景

埋甕出土状況

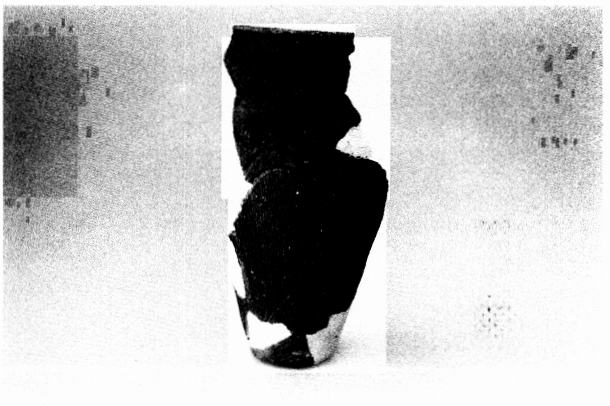


Ｊ－１号住居跡出土土器１

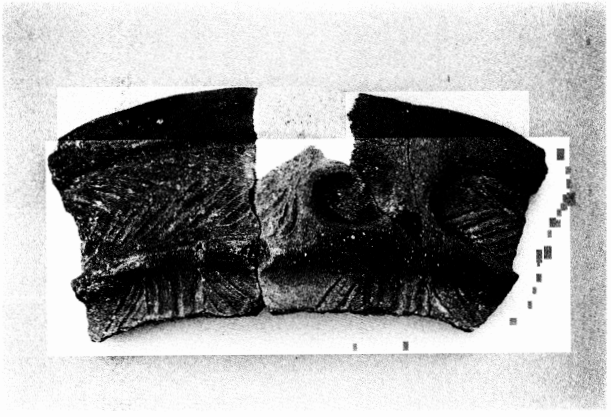


Ｊ－１号住居跡出土土器３

Ｊ－１号住居跡出土土器４



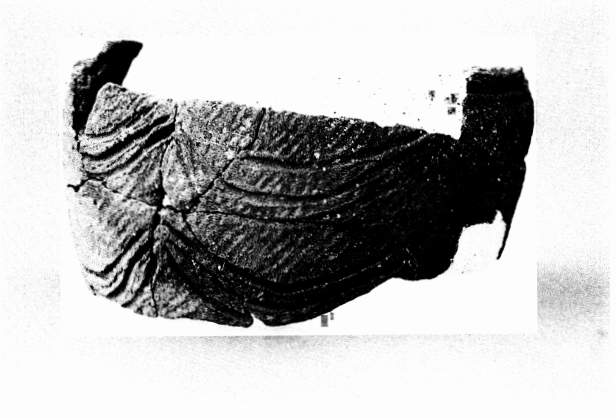
Ｊ－１号住居跡出土土器５



Ｊ－１号住居跡出土土器２

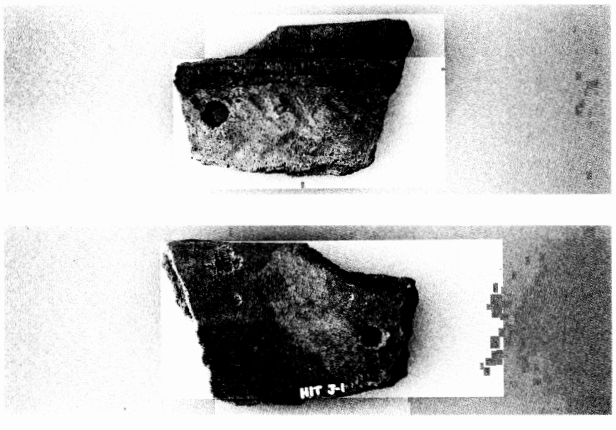
Ｊ－１号住居跡出土土器６

Ｊ－１号住居跡出土土器９



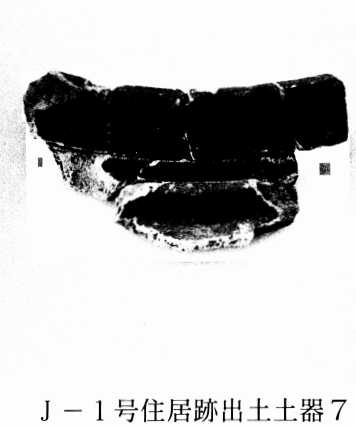
Ｊ－１号住居跡出土土器12

Ｊ－１号住居跡出土土器14



Ｊ－１号住居跡出土土器28

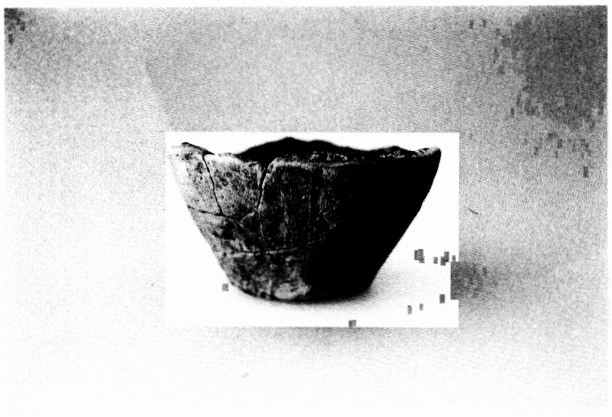
Ｊ－１号住居跡出土土器10



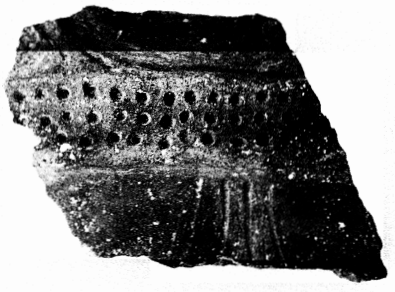
Ｊ－１号住居跡出土土器７

Ｊ－１号住居跡出土土器８

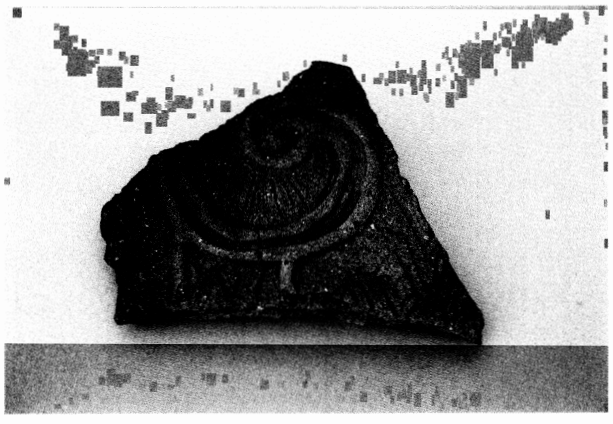
PL 4



J－1号住居跡出土土器37



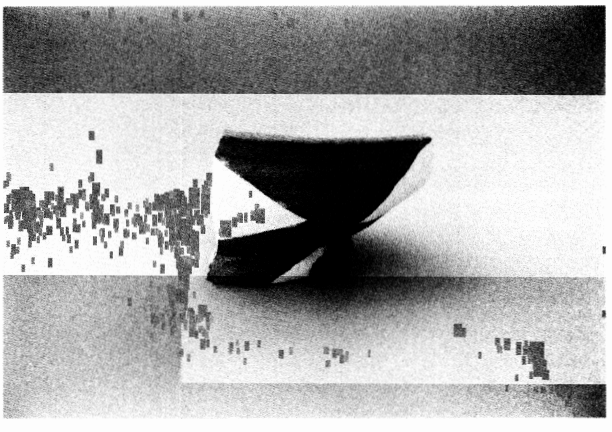
J－1号住居跡出土土器38



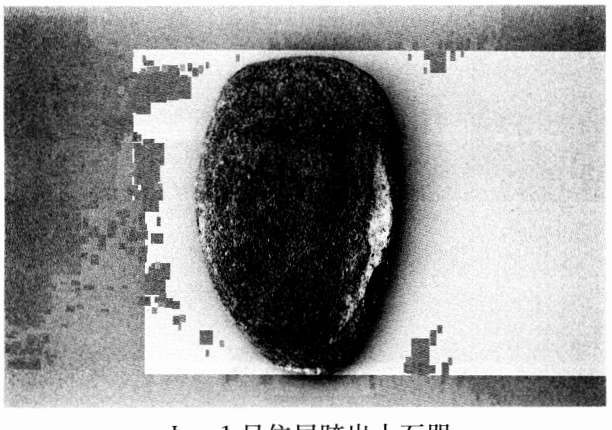
J－1号住居跡出土土器46

1号埋甕出土土器

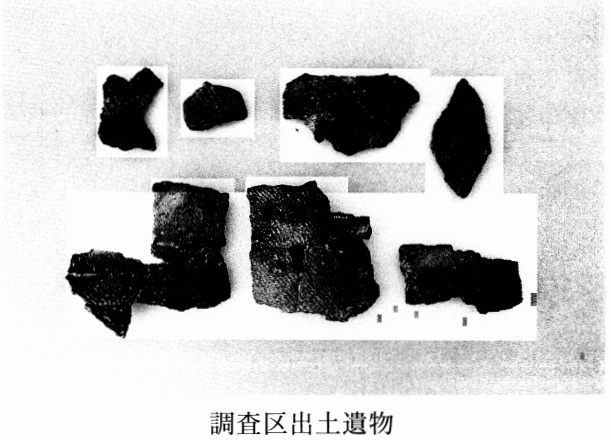
H－1号住居跡出土土器1



調査区出土遺物14



J－1号住居跡出土石器



調査区出土遺物

引田高堰遺跡

送電線新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年９月20日印刷
平成13年９月28日発行

編集・発行／群馬県勢多郡富士見村遺跡調査会
群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1
電話（027）288-6111

印　　刷／朝日印刷工業株式会社